

やってみよう!

理系学生が創る文芸誌

# えんそく

vol.1 2004 春号  
web用レプリカ版

# 雪と花火

You kissed her naively

星 裕 一 郎

自室の甲高いインターホンの音で榊真琴は目を覚ました。

すぐに視界に入るのはいつものどおり天井。しかしどこかいつもとはそのアンダールが違う。

水気を失ったカボチャのような鈍重な感覚だったが、大抵彼にとつて寝起きはそんなものだったし、そもそもカボチャに水気があったかどうか定かではない。

榊が寝ていたのは持ち主以上に堂々と構えているソファ。このソファはいつもここにいるが、もちろん普段はこれを寝床として使用していない。自分はこうしてここで寝ていたのだろうかと昨夜のことを思い返した。

アパートの隣人が訪れて明け方まで話し込んだところまではすぐに思い出す。しかしその後がどうも曖昧。彼女が訪れるといつも決まってこのパターンだ。

再びインターホン。

そうか、あのまま眠ってしまったのか。彼女はいつの間自分の部屋に戻ったのだろう。そんなことを考えながら、テーブルの上に置いてある煙草に手を伸ばした。

三度目のインターホン。

煙草を諦めた榊は軽く舌打ちをしてドアに向かった。彼がド

Aを開けるとそこには一人の女性。彼女に見覚えはない。しかしクリアでない今の頭脳にはどうも自信が持てないのも事実。

「あの……、どちら様でしょうか？」ソフトな口調で榊は言う。

「あの……」彼女は不安そうな顔付きで尋ねた。「こちらは榊さん……、探偵の榊真琴さんのお宅ですよ？」

「はい、そうです」榊は答える。少なくともこの返答には自信がある。本日最初の自信だ。

「私は昨日の昼頃電話をした者ですが……」

それを聞いて榊は内心で慌てた。しかし表情には出さないように咄嗟にコントロール。

「ああ、昨日電話をくださった……」そこまで言つて榊は両手を広げるようにして見せたが、その仕草に特に意味がないことを自覚する。

「榊木敦子です」

「榊木さんですね、はい。お待ちしました」

「はあ……」やはり不安そうに敦子は頷いた。

もちろん忘れていたなどとは間違つても言えない。いや、忘れていたわけではないのだが寝坊してしまっただけなのだと思は自分を納得させた。

「どうぞ」榊は敦子に入室を促す。

それから彼は部屋に入った敦子に正面の椅子をすすめた。

「お茶でも出しますね」そう言って榊は立ち上がったてキツチンに向かう。

「お構いなく」敦子はお決まりを口にした。

榊は自分と敦子のすぐ前にカップを置きながら、気が付かないように目の前の女性を観察する。歳は五十代後半くらいだろうか。この世代の女性で探偵という幾分いかがわしい人間にものを頼みにわざわざ遠くまで足を運ぶような人間にしては、比較的控え目と評価できる身だしなみをしている。どうやらこの雰囲気に着かぬらしく、先程から敦子はきよろきよろと部屋を見回していた。

「何かおもしろいものでも見付かりましたか？」棘のない言い方を心掛けて榊は尋ねる。

「あ……、いえ……」困った顔をして敦子は答えた。「すいません、私……、探偵の方のお宅にお邪魔するのはこれが初めてなもので……」

どうやら彼女は、初めて探偵のお宅にお邪魔したら部屋をきよろきよろと見回せ、という間違った教育を受けて育ってしまったのだろう。

「失礼ですが私、その……、昨日お電話したときも、探偵事務所というか、とにかくそういう場所を想像していましたので

……」

「ああ、そのことですか」榊は苦笑して言う。「何を隠そう、所員と呼べるような人間が僕一人しかいないので、わざわざ事務所を用意する必要がないんですよ」

「榊さんはいつもここで探偵のお仕事を？」

「時と場合と状況によりますが、お話を伺うときは大抵ここでですね」

「それって……、どこか重複していませんか？」

「ええ、残念ながら」榊は微笑んでさっき差し出したばかりのカップを示して言った。「それ、粗茶ですがどうぞ」

「どうも」敦子は頷いてからカップに口を付けた。「これ、おいしいですね」

「おいしい粗茶なんですよ」榊は言った。「それより以来の内容をお伺いしてもよろしいですか？」

「ああ……、そうですね」敦子はそこで少しだけ間を置いてから続けた。「えっと……、来週の日曜日、私の主人の誕生日パーティがあるのですが、そのパーティに出席していただきたい娘の雛与ひなよの行動を見張っていただきたいのです」

「榊さんのお嬢さんを……、ですか？」

「ええ」敦子は頷いた。

「えっと、どういふことでしょうか？」意味がわからなかった

ので、櫛は素直にそう尋ねた。

「つい先日のことなんですけれど……」敦子は言う。「もう歳が歳だったので仕方がなかったのですが、私の父が他界しました……。母はもう数年前に逝ってしまいましたので父は私たち夫婦と一緒に暮らしていたんです。私の父は画家でして、自宅の離れにアトリエといいますが、仕事場……、作業場かしら……？

まあそんなアトリエが二つあるんです」

櫛は敦子を見つめて先を促す。

「アトリエの一つには画材やら何やらが置いてありまして……、私は絵画について詳しくないのでよくはわからないのですが、そういった絵の為に道具が置いてあり、実際、いつも父はそこで絵を描いていました」敦子は思い出すように目線だけを天井に向けて言う。「それでもう一つのアトリエなのですが、こちらには画材などは一切置いてなく、壁や机の上、とにかく部屋中に父の作品が並んでいるんです。それで……、実はつい先日……、父の書齋を整理してましたところ父の日記のようなのが見付かりまして、その日記には、アトリエにある作品の中に、私の娘である雛与の肖像画があるということが記してあったんです……。でも……、とにかくそのアトリエには部屋中に父の作品が置いてあるんですけど、どこにもそれらしいものが見当たらないんです」

カップを手にとり取って、櫛は黙ってそれを自分の口許まで運んだ。

「私の父は、そのアトリエ以外で絵を描くことはほとんどなかったのですが、どうしてか風景画ばかりを描いていました、そもそも作品の中に人物画がないんです。父はそれほど有名な画家というわけではありませんけれど、それでも、父の作品を気に入ってくださっている方々はいらっちゃって、その方々には父の描いた孫の肖像画は大変興味深いものなんです」

「孫の絵……、ですか」つまりは都合の良い取引が可能だという意味だろうか。ぼんやりと櫛はそんなことを考えた。

「でも……、どうしても私たちには、どの絵が雛与の肖像画なのかわかりません。それで仕方がなく、先週娘を家に呼びましてアトリエを確認させたんです」

「家に呼びまして、ということはお嬢さんとは別々に暮らしていらっしゃるんですか？」櫛は気が付いたことをきいた。

「雛与は高校を卒業してすぐ、家を出ていったんです。父の葬式で、五年ぶりに顔を合わせました」

「家出ですか……」櫛は適当に相槌をうつ。「何か、その問題と言いますか、お嬢さんとの間にトラブルでもあったんですか？」

「私も主人も忙しい身なので、子供たちが小さい頃から、父

……、子供たちにとっては祖父ですけれど、ずっとその父に面倒をみてもらっていたんです。それで……、雛与はどうやら、ずっと自分たちを可愛がってくれていた父に憧れてしまったのでしょうか、高校に入学するかしないかの頃、画家になりたいと言い出しまして……。私たち夫婦は、あの世界がどれほど大変なものなのか、父を見て知っているつもりですので、猛烈に反対を致しました。それに反発して……。その……。雛与は家を出ていってしまったんです」

「子供たち、と仰いましたが、雛与さんにはご兄弟がいらっしやるんですか？」

「ええ、清彦という弟がおります」

「ちなみに、雛与さんが画家になりたいと言ったとき、お父様はどちらの味方に？」

「当時、既に父は寝込んでいましたので、どちらにも……」

榊は黙って頷いた。

「父の葬式が一段落してから、雛与を家に呼んでアトリエを確認させたのですが、娘はどれが自分を描いた絵なのか、私たちには教えてくれませんでした」少量の非難を含ませた口調で敦子は言った。

「雛与さんにはどれが問題の絵なのか、わかったのでしょうか？」

「さあ……。どうでしょう……？」

「雛与さんはアトリエを見ても、絵について何も言わなかったんですか？」

「ええ、何も……。でも雛与、帰り際に私にこう言ったんです」敦子是不機嫌そうに両腕を小さく組んだ。「もうすぐ私の父親だった人の誕生日でしょう？ どうせまたパーティでも開くんでしようから、今年はちゃんとご招待くださいね、と」

榊は腕をテーブルの上に置いた。

「私……」言いにくそうな顔をして敦子は榊を見つめた。「雛与がパーティに出席して、それで……。私たちの目を盗んで……。その絵を勝手に持ち出すんじゃないかって心配しているんです……」

「雛与さんが絵を盗むということですか？」敦子の突飛な発想に苦笑して榊はきき返した。

「ええ……」敦子は頷く。「そんな心配をしているんです。けれど……。いくら家を出ていったと言っても娘は娘です……、それに主人の誕生日パーティという場なので、あまり大事にはしたくないんです。だから雛与の監視を榊さんにお願いたいのです」

「じゃあ高校生の頃から言ってた、雛与の尊敬している絵描きさんって、雛与のお祖父ちゃんのことだったの？」北島静香は驚いて大きな声で椿木雛与に尋ねた。

「そうなの……」呟くように雛与は答えた。

椿木雛与は北島静香の高校時代からの親友である。

静香は高校を卒業してから二年後に結婚して、今では一児の母である。友人の雛与は高校時代からの夢であった画家を目指して、絵の勉強をしている最中だ。まったく違う人生を歩もうとしている二人であったが、高校時代からもう五年近くの年月が経とうとしている今でも、月に一度くらいはこうして会って、お互いの近況や当時の友人に関する話をするという関係が続いていた。

静香の住むアパートの近所にある喫茶店。

平日の日中だからか、店内は落ち着いていて客の人数も随分少ない。実際、静香のいる席の周りには他の客はいなかった。数分前にこのテーブルに紅茶とコーヒーマスターのカップを置いたウェイトレスも、彼女の義務であるこの退屈こそ人生の無駄遣いだという表情で、カウンターの側にぼんやりとした様子で立っ

る。

一昨日の夜、雛与から電話で連絡があったのだ。

相談したいことがあるの。雛与は電話口でそう言った。

雛与は勉強で忙しいので、彼女の方から連絡をよこすことは稀であった。こうして二人が出会うときは、静香の方から連絡をするのが普通だったので、そのとき静香は少し驚いた。

「この前ね……、お祖父ちゃんのお葬式があった後……、親に呼び出されてね……、私、お祖父ちゃんの描いた絵を観てきたの……」目の前の雛与がそう切り出した。

雛与とは高校二年生のときに同じクラスになってからの付き合いであったが、静香が見ている限りでは、彼女が周囲の友人に自分の家族のことを話していたことはなかったと思う。

もちろん最初はそんなことは気にもならなかった静香だったが、深く付き合うようになってから、雛与が執拗に家族の話題を避けていることが気になっていった。

高校を卒業する少し前に雛与が自分の家に遊びに来たとき、初めて彼女の家族の話を開かされたことを静香は思い出した。

「親に呼ばれたときは……、何事かと思っただって私が家を出てからこんなことは一度もなかったから……」雛与は俯いたまま言う。「だからね、もしかしたら……、あの人たちもいろいろ考えてくれて、私の夢に賛成してくれたのかなって

……、そう思ったの」

「でも……、そうじゃなかったのね？」静香は真面目な顔でできた。雛与の態度が本当に心配だったし、何か話していないと息が詰まりそうだったからだ。

「うん……、そうじゃなかったの……」雛与は静香の顔を上目遣いで見て言った。

雛与は実家で、祖父のアトリエに彼女の肖像画があるという話を聞かされたそうだ。しかし雛与の祖父は人物画を描くことはなく、当然そのアトリエにもそれらしい絵画は存在しなかった。

「じゃあもしかして雛与、お祖父さんのアトリエを見ても、どれが自分を描いた絵なのかわからなかったの？」

雛与は静香の目を見つめたまま頷いた。それから彼女は少しほっとしたように静香に向かって微笑んだ。

「今日の日曜日だね、父親の誕生日パーティーがあるの。私、アトリエの鍵は持つてるから、その日にアトリエに行つて、そこにある絵をもう一度確認するつもり……」

静香は腕を組み首を傾げて考え込んだ。

画家である祖父のアトリエ。そこにある皆の雛与の肖像画。しかしそこには彼女の肖像画どころか、人物を描いた作品が一つもない。

まず考えられるのは、もうその絵は売れた、あるいは譲られていて、すでに誰か他人の手の中にあるという状況だ。しかし雛与の記憶が正しければ彼女の祖父の描いた人物画というものは存在していたとしてもあまりに珍しいものなのでそれを売ったことを彼女の両親たちが忘れていたとは考えにくい。

次に考えられるのは、雛与の両親が嘘をついているということだろう。この肖像画の話は雛与の祖父の日記に記されていたそうだが、両親は雛与にその日記とやらを見せていないので、本当にそんな記述があったかどうかはわからない。もしそうであれば、雛与がアトリエを探しても当然そんな絵は見付かる筈がない。しかし彼らが雛与にそんな嘘をつく理由が思い付かない。

「今日はごめん」突然明るい声で雛与は言った。「久しぶりに会ったのにこんな暗い話で」

静香は雛与の方を向いた。

「本当にごめんね」泣き顔に崩れてしまいそうな笑顔で雛与は言う。「ありがと。なんか静香に聞いてもらえて少し楽になつた気がする」

雛与の明るい表情はやはりどこか強がっているように見受けられた。それは無理もないことだろう。しかし少なくとも親友のこの発言を聞いて安心することができたし、そう言ってもら

えたことが嬉しくもあつたので、静香は雛与に向かつて再び微笑んだ。

カップに残っていた紅茶を飲み干して、目の前の親友は溜息をついた。

「そういえば、雛与の弟、何ていう名前だったっけ？ 彼、元気だった？ 実家に言ったとき、会ったんでしょ？」 静香は少し話題を変えようと、思い出したことを口にした。

「清彦のことね。うん、会ったよ。元氣そうだった」

雛与には三つ年下の弟がいた。両親とはあまり上手くいっていなかった雛与であったが、弟の清彦とは仲が良く、彼女がまだ実家で暮らしていた頃は、家族の間に何かがあると清彦が雛与の側についてくれていたらしい。雛与は実家を出てから先月の祖父の葬式までずっと両親と会っていなかったそうだが、清彦とはたまに食事をしていると静香は聞いていた。

「えっと……、清彦君は今、何をやってるの？ 学生？」

「うん、大学生」

「もう清彦君が大学生か……」

「どうしたの？」 静香の返答が可笑しかったのか、笑いながら雛与は尋ねた。

「ううん、何でもないよ」 静香も微笑んで答える。「雛与、絵の勉強、楽しい？」

「もちろん」 雛与はきっぱりとした口調で言う。「絵を描いているときに私にとつて一番幸せな時間なんだから」

雛与がそう答えたとき、静香は突然あることを思い付いた。

「ねえ、雛与？」

「何よ？ どうしたの？」 呆れたように雛与。

「ねえ」 静香は真面目な顔付きになって雛与を見た。「雛与は、大好きだったお祖父さんの描いた作品、持っているの？」

「ううん、持っていないよ……」 雛与は首を横に振る。「実家にあるお祖父ちゃんの絵は全部両親のものだし……」

「さつき雛与、今度の日曜日に親の誕生日パーティがあるって言ったよね？」

「うん、言ったけど……、それがどうかしたの？」

「だったら、その誕生日パーティのときに……」 静香は口許を上げてから片目を瞑った。「ご両親からお祖父さんの絵を一枚、いただいでいいかない？」

「え……？ どういうこと？」

「だってそのアトリエにある絵っていうのは、お祖父さんが描いた絵なんでしょう？ だったら大事な大事な孫である雛与にも一枚くらいそれを所有する権利があるんじゃない？ その上、雛与は画家を目指しているんだから……。いつまでも娘の夢を認めてくれないような親にはこれくらいのことをしてもら

「いんじゃない？」

困った顔で雛写は静香を見つめた。

「実はね、私の知り合いに……、といつてもアパートのお隣さんなんだけど……、探偵っていうか何でも屋みたいなことをしてる人がいるの。だからその人にも協力してもらって、それで、雛写のお祖父さんの絵をそのアトリエから持ち出さない？」

## 3

柏樹亜季は久しぶりに自分の通う国立工科大学の図書館を訪れた。

研究上いくつか確認しておきたいことがあつてある論文を見つけたのだが、このところ仕事が忙しく、大学に来ることができなかつたのだ。

少し肌寒かつたので、着ている白いセーターに手を隠した。もう講義が終わっている時期だからだろうか、周りを歩く人間は少なかつたが、皆一様に寒そうにしていた。

図書館の入り口を抜けて彼女は二階に上がる。書架を眺めていると目的の論文が掲載されている雑誌はすぐに見付かつた。

亜季は雑誌を手持って、コピーをする為に一階に向かおうとした。すると閲覧席に知つた顔を見付けた。

「久しぶり」亜季は歩いて近付き、その男性に声を掛けた。

「あ、柏樹さん」彼は机の上の本から目を離して亜季の方を向いた。

椿木清彦は亜季と同じく工科大学の理学部の一年生である。清彦とはクラスが一緒に、入学してすぐに行われた自己紹介の際に亜季の隣の席に座っていた。その縁があつて、今でも講義などで見かけると、お互いにこうして挨拶くらいはしている。清彦は一浪しての入学と言っていたので、歳は亜季より一つ上の二十歳の筈である。

「本当に久しぶりだね。ちゃんと大学に来てる？」優しい口調で清彦は言う。しかしいつも彼はこんな口調だ。

「ちよつと最近、他の用事が忙しくつてあんまり来てなかつたかも」

「ふうん」

「椿木君は図書館でお勉強？」

「うん」清彦は頷く。「だつてもうすぐテストだよ」

ずっと大学に来ていなかった上に、こうしてたまに来てても掲示板など見ていなかったもので、もうすぐテストだということを亜季は忘れていた。

「あれ？ そうだつて？」

「忘れてたの？」清彦は少し呆れたような顔になった。「それ

で大丈夫？」

「うん、大丈夫。用事が済んだら掲示板、見てみるよ」亜季は悠長に答える。「教えてくれてありがとう」

「どういたしまして」亜季の返答に清彦はおもしろそうに笑った。「でも、テスト勉強じゃなかったら、どうしてここに来たの？」

レポートか何か？」

「どうしてだろうね？」説明が面倒だったので亜季は答えをばぐらかした。

清彦に別れを告げてから亜季は一階に下りる。清彦の言うとおりテストが近いからか、ほとんどの座席は人で埋まっていたが、コピー機の方は三台ある内の二台が空いていたので、すぐにコピーを済ませられた。

再び二階に戻り、雑誌を元の位置に戻すと、ついでにさつきコピーしたばかりの論文のレファレンスをいくつか見ておこうと、人気がない書架の間を歩いた。しかしこちらはなかなか見付からず、数回書架を行ったり来たりする羽目になってしまった。しばらくそうしていると、後ろから足音が聞こえた。反応して亜季が振り返ると、足音の主は先程の椿木清彦であった。「もう帰っちゃったかと思った」安心したように清彦は言った。「どうしたの？」亜季は尋ねる。

「ちょっと話があるんだけど、時間ないかな？」

「少しなら平気」頷いてから簡単に亜季は答えた。

二人は図書館を出ると本館の建物へと歩いた。清彦は閲覧席で話をしようとしていたようだが、周囲には勉強をしている人がたくさんいたので、気を遣って生協食堂に向かうことにしたので。

亜季はポケットから煙草を取り出してライターで火を点けた。

「柏樹さんって煙草吸うんだ？」清彦は言う。「あれ？でも柏樹さん、いくつ？」

「十九歳」

「それって未成年だよな？」清彦は笑って尋ねる。

「今年の柏樹さんはそうかもね」可笑しそうに亜季は言った。半ば予想していたとおり、食堂にも人が溢れていた。

しかし、トレイの置いてある、つまり食事を目的として使用されているテーブルは全体の六割くらいで、その他は図書館の閲覧席同様、勉強場所として使われていた。二人はどうか奥の方にあつた空席を見付けてそこに着く。

「それでお話って？」亜季はそう尋ねてから、トレイの上のスパゲティにフォークを当てた。清彦は食事を済ませていたようで、彼の目の前には紙コップに注がれたコーヒーだけが置かれている。

クラスメートはどう切り出せば良いのか考えているような表

情をしている。

「まさか愛の告白？」亜季はにっこりと微笑んで冗談を言う。

「うん、違うよ……。変な誤解しないでね」慌てて清彦は否定した。

「誤解なんてしてないわ。冗談よ、冗談」笑顔を崩さずに亜季は言った。「それでお話して？」

どこか要領を得ない清彦の話であったが、それは、その話の登場人物が彼自身の身内で、しかも話の内容も両親との不仲の末に起きた五年前の姉の家出に先月の祖父の死、といったあまり愉快と称せる部類でないからだろうと亜季は思った。

「なんか大変みたいだね」亜季がドライな人格であることを清彦は承知している筈なので、極めて簡単に感想を言った。

「うん……」小さく頷いて清彦は短い声をこちらに返した。

「それで」亜季はあどけない口調で言う。「大変なのはわかっただけけど……、私に何をしたいの？」

「それが……」清彦は俯いたまま上目遣いに亜季を見た。「柏樹さん、明後日の日曜日って何か予定がある？」

亜季は目を瞑って頭の中にある自分のスケジュールを確認した。この数日を費やした急な仕事の方は今朝の明け方に一段落していたし、その日曜日のところには特に用事は書き込まれていない。

「別に何も無いけど、どうして？」

「その日、お父さんの誕生日パーティがあるんだけど……、柏樹さん、それに参加して欲しくないかな……？」

「どうして私？」

## 4

時刻は午後三時過ぎ。太陽はつい先程大きな雲に隠れてしまったばかりだったが、冷たい風もなく、この季節にしては比較的暖かい。

榊は椿木の屋敷の門から出ると、乗ってきた車で自分のアパートへと続く道をゆつくりと走った。車が走っているその通りの中央には公園のようなスペースがあり、それに沿って両脇に道路が続いている。公園には誰もいなく、葉を失った木々と、ところどころ塗装のがれたベンチと、寂れた金属製の灰皿がぼつんぼつんと点在しているのみ。いくらか寂しい風景ではあるが、休日中の遊園地のような押しつけがましい程に明るい風景よりはずつとましだったし、彼はどちらかというと寂しい風景の方が好きだ。こんな陽気ならばこの道を歩いて帰っても良かったかなと、それらを目で追いながら榊は思った。

今日が椿木清志の誕生日パーティが行われるその日だった。

先日榊の部屋を訪れた敦子の依頼は実の娘である椿木雛与が屋敷の離れのアトリエにある絵を持ち出してしまいかもしれないので娘の行動をこっそり監視してくれとのことだった。依頼のあったその日、アトリエやその周囲を把握する目的で、榊は敦子と共に彼女の住む屋敷まで出向いた。必要はないと思つたが、そのときに一応その状況を写真に撮っておいた。それで今日の昼頃、もう一度現状を確認する為に、椿木に再度訪問した。

一応事情は理解したつもりだが、実の娘を監視してくれという今回の依頼は、正直大仰に思えた。しかしこれは仕事なので仕方がない。そんな風に自分を切り替えて榊は仕事に集中することにする。それに、よくよく考えてみれば、普段から自分のしている仕事の大部分は、少なくとも榊自身にとつて、電車のドアのノブくらい意味のないものだからどうしようもない。

のんびりとした光景につられた極度の安全運転で、榊はさつき見たばかりのアトリエの様子を思い出そうとした。

二つのアトリエの外観は、どちらも木造小屋のようで、幾分建物の強度が貧弱だという印象を受けたが、それはすぐ側に立派で大きな屋敷が存在していたからであろう。

しかしアトリエの中は壮観だった。

ダイナミクスを伴って彩られた桜や、寂しげにひっそりとし

た枯葉たちの群れ、遠くに微かに見えるたった一つの雪山の逆説的に際立った迫力と、生き生きとした濃緑の木々。アトリエ内には、四方の壁や机の上、部屋中にいくつものこうした作品が置かれていた。そして敦子が説明したように、それらの絵のどれもどこかの風景を描いたもので、雛与の顔を知らない榊にもそこに彼女の肖像画がないことは明らかだった。

部屋中の作品の中で特に榊を惹き付けたのが、雪が舞い散る夜空にぼつんと花火が打ち上げられている風景を描いた作品だった。

先日撮った写真などを用いて一通りの確認を終えると、屋敷から敦子を呼んで中を認めてもらってから、念の為にアトリエの扉の鍵をかけておくように告げた。

榊を乗せた車がようやくアパートに到着する。

榊は車から降りると軽く体を伸ばして、すぐにトランクからカメラなどの荷物を出した。

「こんにちは。榊さん」

すぐ後ろから聞き慣れた少女の声がかえったので、榊はそちらに振り向いた。

「あれ、夏奈芽。こんにちは」榊は右手を挙げて夏奈芽に声を掛けた。「もう授業は終わったの？」

彼女はアパートの隣人の娘である。榊の記憶が正しければ小

学一年生だ。

「はい。さつき授業が終わって図書館に寄ってきました」こくと領きながら大人びた口調で夏奈芽は言う。「榊さんはお仕事のお帰りですか？」

「お仕事の帰りと言えば帰りなだけど……、これからまた夜にお仕事なんだ」榊は微笑んでおもしろそうに言う。「だからお仕事の休憩中かな？」

「お手伝いしましょうか？」トランクを見ながら夏奈芽は尋ねた。

「平気だよ。どうもありがとう」

夏奈芽がトランクから荷を取り出すのを待っていてくれたので、二人は一緒に階段を上がった。

二人は同じ三階の住人である。持っていた荷物のおかげで、榊は夏奈芽と同じペースで階段を上がることができた。

「そういえば、お母さん、元氣？」榊は思い付いた質問をする。

「母をご覧になっていないんですか？」夏奈芽はきき返した。

「うん」榊は前を向いたまま頷く。「僕、この仕事の準備の關係で最近、ここには帰ってなかったから」

「そうですか」夏奈芽は言う。「元氣かどうかはわかりませんが、特に変わりはありません」

「ふうん、そう」榊は相槌をうった。「この前、お母さんが部

屋に遊びに来た次の日に、この依頼があったんだけどね……。

今回の仕事のことでお願いをしようと思っただけで電話をしたんだけど、電話に出なくて。夏奈芽のお母さんからも何度か電話があったんだけど、そのときには僕もちよつと忙しかったから、二人ですつとすれ違い」

「お仕事、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」榊は答えた。「どうにかなったからね」

ようやく三階に辿り着く。

「その荷物、大変そうですね」廊下を歩きながら夏奈芽。

「まあね、でもこれが僕のお仕事だから」

「持ちにくそうな荷物を運ぶことができますか？」不思議そうな顔で夏奈芽はきいた。

「うん、違うよ」榊は答えた。「僕の仕事はいつでも大変そうにしていること」

5

午後六時きっかりに椿木雛与と北島静香の二人は正面玄関から建物に入った。

陽が出ていた日中は季節外れの暖かさだったが、冬は段々と本来の寒さを思い出し、もう外はすっかりと冷え込んでいた。

建物の中は心地良い暖気で満たされていたので、雛与はそこで体を暖めるように大きく深呼吸をした。ただでさえ緊張していた上に、その鋭い寒さで先程まで少し体が固くなっていたのだ。

祖父が亡くなったばかりなので、今年のパーティは数人のゲストだけを招いて、あまり盛大には行わないと聞いていた。しかしそう言われてもここ数年このパーティに参加していなかった雛与には、それがどの程度の規模なのか具体的に想像することはできなかった。

玄関を抜けて通路を右に進んだところにある大広間には、大きなテーブルが二つと小さなテーブルが五つ並んでいた。そのどれにも真っ白なテーブルクロスが掛けられていて、大きなテーブルの上には既に美味しそうな料理がいくつも並んでいる。

相変わらず大仰に構えているシャンデリアや部屋の隅に置かれたソファの数々、壁に掛けられた悪趣味と言えなくもない装飾品など、広間は雛与が住んでいた頃とほとんど変化の見られない内装だった。しかし、玄関をくぐったときもこの大広間に入るときも、彼女はそれらを懐かしいとは決して思わなかった。二人が到着したときには、既に六人の人間が大広間に集まっていた。雛与が顔を知っていたのはその内の五人。

雛与の両親である椿木清志と敦子。それに、清志の部下であ

る橋本と石井、秘書の斉藤がその五人だ。清志は部下二人と秘書を連れて、一つのテーブルを囲んで話をしている。壁際の辺りで母の敦子が話をしている黒いスーツの男性には見覚えがなかった。遠目からなのでよく見えないが、細身で誠実そうな表情だ。歳は二十代後半くらい、自分や静香よりは上だろうと思うた。

横目でちらりと静香を見た。彼女も緊張しているようで、屋敷に到着してから落ち着かずにはしゃべっていた。

「清彦君がまだいないね」見られたことに気が付いたのか、小声で静香がそう言った。

「そうね、見当たらない」

「あれ？」静香が広間を仰ぎながら不思議そうに呟いた。

「どうしたの？」雛与はきいた。

「あ、うん……。何でもないよ……」

結局、喫茶店で静香が言った突飛な提案は有耶無耶になったままパーティ当日を迎えてしまった。というのも、あれから数日後電話で静香に確認したところ、例の探偵との連絡がつかなかったそうなのだ。

あの日雛与は静香に、もし絵を持ち出すとしてもそれは清彦には内緒にして欲しいということをお願いしておいた。

もし彼がそれに賛成して自分の為に手を貸すと言ってくれた

としても、やっぱり大事な弟をこんなことには巻き込みたくなかった。また、家族四人の中の唯一の味方である弟に反対されることを想像するのもやはり怖かったのだ。

二人に気が付いて両親たちが雛与たちの方に近づいてきた。静香がいる手前か、それともこの場の雰囲気がそうさせるのか、両親は二人とも妙ににこやかだ。

「どうも初めまして。雛与の母の敦子です」敦子は静香に自己紹介をした。

「北島さん、今日はお忙しいところを私の為にどうもありがとうございます」清志も静香に挨拶をする。「雛与がいつもお世話になってます」

「あの……、いえ……」突然の展開に静香は二の句が継げないようだ。

「そんなに緊張しなくても大丈夫よ」横から雛与が助け船を出す。

「雛与の言うとおりです」清志が相変わらずの良く通る低い声で言う。「どうぞ、ゆっくりしていきなさい」

## 6

雛与の弟である樺木清彦は六時半を少し過ぎた頃に雛与の見

知らぬ女性を連れて大広間に姿を見せた。清彦は雛与にすぐ気が付いて笑顔のまま目で挨拶をする。これでパーティの出席者が全員揃ったのだろう、清志が簡単に皆の前で挨拶をして、場はすぐに歓談となった。この形式は雛与のいた昔のまま変わっていないようだ。

「静香、大丈夫？」雛与は静香にきいた。

「私、どうもこういう場に慣れないみたい」苦笑して静香は言う。「とりあえず落ち着きたいから、清彦君のところに行っても良い？」

「私のものじゃないんだからどうぞご自由に」雛与はそう言いながら手に持っていたグラスを上げた。「一人で大丈夫？」

「私、子供じゃないのよ」

静香が清彦たちのいるテーブルに向かったので、とりあえず雛与は今夜の招待の礼を告げる為に敦子のところまで歩いた。

「久しぶりね」雛与を一瞥して敦子は言った。

「この前お会いしたばかりです」淡々と雛与。

「そうね、確かにこの前の久しぶりに比べれば今回はかわいいものね」

「どうもこんばんは、樺木雛与です」母親の嫌味を無視して、さつきから気になっていた男性に自己紹介をした。

「どうも」彼は雛与に軽く頭を下げた。「樺真琴です」

雛与は榊真琴と名乗るこの男性と母親の関係が気になった。

「榊さんは母とどういったお知り合いなんでしょうか？」

「それはなかなか難しい質問ですね」榊は唸ったかと思うとすぐに微笑んで見せた。「お母さんのお仕事をお手伝いしているんですよ」

そのまましばらく三人で会話をしたが、その後の榊の返答も、はぐらかされたような、よくわからないものばかりだった。

雛与は敦子の言動から、榊が自分たちの家庭の事情を多少なりとも知っているのだろうと思った。そうでなければこの母親はもう少し世間体を気にした話し方をする筈だ。

「榊さんはお仕事で知り合ったお友達よ」敦子が少し荒い語気で言う。「貴女、何か変な勘違いをしていない？」

「いえ、とんでもない」あくまで澄ました口調を雛与は心懸けた。

「まあいいわ。それより……、後でお父さんにもきちんと挨拶をするのよ。それと……、あまり屋敷の中をうろうろとしないようにね」

「うろうろ、ですか？」何が可笑しかったのか、榊が横でくすくすと笑った。

「あの……、お母様……」この呼称を敦子に対して使用することに大きな抵抗を感じたが、他に適切な表現が思い浮かばな

かったので仕方がなくそう呼ぶ。

敦子は無言で先を促した。

「後でお祖父ちゃんのアトリエに行くつもりなだけど……、構わないでしょう？」

それを聞いて敦子は榊の方をちらりと見た。しかし榊はそれに気が付かないようにテーブルの上のグラスをおもしろそうに眺めている。

「ええ、それくらいなら構わないわ。けれどそのときはきちんと私がお父様に許可をいただくのよ」敦子はそこで一息入れてから先を続けた。「それと……、例の絵、どれだかわかったら私たちにちゃんと報告するのよ」

またその話か、と雛与は思ったが口にしなかった。

「では榊さん、また後程……」

そう言うて母親はテーブルを離れていった。結局雛与は敦子に招待の礼を言わなかった。

気が付くと雛与は榊と二人きりになっている。

「なかなか手厳しいお母さんですね」榊は誰に言うともなくしみみと言った。

「ええ」雛与は予想していなかった榊のその発言に少し驚いた。

榊は考え事をしているように空気を見つめながらグラスを傾けている。

「あの……、私もこれで」どこか妙に重い雰囲気を感じたので、自分のグラスを持つて雛与もそのテーブルを離れることにした。

壁に掛けられている時計が示している時刻は七時過ぎ。

雛与が広間を見回すと、既に清志と斉藤がいなくなっていた。さっきまで彼らがいいたテーブルには橋本と石井しかいない。入り口から見て右側の壁際のソファに静香や清彦がいたので、雛与はそちらに向かった。

「お母さん、どうだった？」雛与が近づくと、心配そうな顔をして静香が尋ねた。

「相変わらず」雛与は微笑んで答えた。

「もしかして何かまた言われたの？」と清彦。

「大丈夫よ」雛与はそう言うと、清彦が連れてきた女性を示しと言った。「それよりこちらの方を紹介して」

「ああ、うん。そうだね」清彦は気が付いて紹介をした。「えっと……、同じ大学に通っている柏樹亜季さんです」

「どうも初めまして、柏樹亜季です」柏樹亜季は雛与にべこりと頭を下げた。

「こちらこそどうも初めまして。清彦の姉の雛与です」

「もしかして清彦君のガールフレンド？」ずっとこの質問を我慢していたのであろう、ここぞとばかりに静香が尋ねた。

「違いますよ」清彦は否定した。

「違うの？」悪戯っぽく微笑んで亜季は清彦に尋ねた。

敦子との会話で少々気持ちが悪んでいた雛与であったが、四人でしばらく話をしている内に段々と気分が晴れていくのが自覚できた。しかし会話の最中もしばしば一人で煙草を吸っている櫛が視界に入って彼のことが頭から離れない。

「ねえ、アトリエに絵を観に行かない？」雛与が少々酔い始めたことを自覚した頃、隣の静香がそう言った。

「椿木君のお祖父さんのアトリエのことですか？」ソファに腰掛けている亜季が尋ねる。彼女も清彦から家庭のことを少し聞いているのだろう。

「どう？ 駄目？」静香が再び雛与に尋ねる。

「別に大丈夫なんじゃないの？ 僕がいればあの人だって文句は言わないだろうし」清彦は言う。あの人とは母親のことだろう。「姉さん、あそこの鍵、持ってたよね？」

「一応、持ってきてるわよ」雛与は大きく頷いた。

「亜季ちゃんはどうする？ 絵とか、興味ある？」静香が亜季に尋ねた。既に静香が亜季を亜季ちゃんと呼んでいることが雛与には少し可笑しかった。

「皆さんが行くなら一緒について行きます」

「絵を観に行くんですか？」突然背後から声を掛けられて、亜季は飛び上がりそうな程驚いた。はっと振り向くと、そこには先程清彦の母や姉と話していた榊真琴がいた。

「それでしたら榊木雛与さん」亜季が答える前に榊は、亜季を通り越して、前を歩いている雛与の方を向いた。「僕もご一緒してよろしいでしょうか？」

清彦の姉の友人である北島静香の提案でアトリエに絵を観に行くことになった。亜季は絵画に興味がなかったのであまり乗り気ではなかったが、あの場に一人でいるよりは良いだろうと判断して、清彦の祖父のアトリエについて行くことにした。

四人で大広間を出ようとしたとき、後方を歩く亜季は榊真琴に声を掛けられたのだ。

「もちろん構いませんけど……」雛与は少し困ったようにそう答えた。

それから雛与は亜季と清彦と静香の三人を榊真琴に紹介した。姉の雛与だけでなく、どうやら清彦も母親が招待したと思われるそのゲストとは初対面のようなだった。それから今度は榊に三人がそれぞれ名乗る。紹介が済むと五人は大広間を出て、

物静かな通路を右に進んだ。

広間の急激な人口減少と平均年齢上昇の具体的な数字をぼんやりと計算しながら亜季が後ろを歩いていると、榊が現れてからの静香の様子が少し落ち着かないことに気が付いた。

「今夜は寒いね。何か着てくれば良かった」屋敷から出ると清彦がそう呟く。

屋敷の玄関から出て、正面向かって左手の庭に進むと、地面に石畳が並んでいる。それに従ってしばらく歩くと、木造の小屋が二つ見えてきた。

「ここにお祖父ちゃんの絵があるの？」手前側の小屋の近くまで来て、前を歩いている静香が雛与に尋ねた。

「向こう側です」清彦が奥に見える小屋を示して姉の代わりに答える。

手前の小屋の脇を抜けて、奥の小屋の前に五人は到着した。「やっぱり鍵がかかっているね」ドアのノブを捻りながらそう清彦。

「どうぞ」雛与がポケットから鍵を取り出してドアを開け、亜季たちの方を向いて言った。

亜季は四人に続いてアトリエに入ると内の様子に戸惑った。

設置されている電灯はもう何年も変えていないのか、室内は必要以上に薄暗かったのだが、それでも処理すべき視覚的情報

の量はこれまでの退屈な庭の風景の比ではない。部屋の体積はそれほど大きくないのだが、部屋中にまさに様々な風景が置かれていて、その形式も一樣ではない。額に収められているものやそうでないもの、大きさも佇まいも様々であった。

「想像していたよりずっと壮観ですね」亜季の前で櫛がそう呟く。

亜季が先程から眺めていた絵には、雪空に花火が寂しげに打ち上げられている光景が描かれていた。

「これ、きれいな絵ね」静香が亜季に声を掛けた。静香が側にいたことに亜季は気が付いていなかったので少し驚いた。

「はい」亜季は頷いた。「でもこの絵、どこか他の絵と雰囲気の違いませんか？」

「そう？」静香は小さく首を傾げる。「別に変わりないと思うけど」

五人がしばらくそうして絵を覗いていると、突然入り口の方から物音が聞こえた。どうやら誰かがドアを開けたようだ。

「何をしているんだ？」  
物静かに威厳を伴ったその声は椿木清志のものであった。

「清彦か……」清志が言う。  
アトリエの中にいた全員がこの声で清志の方を向いた。亜季は清彦をちらりと横目で見ると

「書斎の窓からこの明かりが点いているのが見えてね、何事かと思つて来てみたんだ」

「すいません」清彦が素直に謝った。

「ここを見なければ私の許可を得てからにしなさい」清志は腕を組んでから今度は全員を眺め回して言う。「ここは寒いから、皆さん、もう広間に戻りましょう」

亜季は清彦に近づいた。

「椿木君」亜季はにっこりと微笑んで清彦に言う。「全部わかったわよ」

「何が？」亜季の言いたいことがよくわからないのか、清彦はそう尋ねた。

「それは後のお楽しみ」

8

アトリエで絵を覗いていた五人は清志の発言に従つて広間に戻ることにした。

雛与たちが戻ると、清志の部下二人は帰り支度を終えて清志に挨拶をしているところだった。秘書は既に帰ったようで大広間には彼女の姿は見当たらず、着ていたコートもそこにはなかった。

「もうみんな帰っちゃったみたいね」静香が言う。

アトリエから戻るとすぐに清彦は亜季を連れてどこかに行つてしまった。長男の代わりに父親の誕生日パーティー出席者である彼らに礼を述べる為、雛与は清彦たちの方に歩いて近づいた。彼らに笑顔で挨拶を済ませて再び静香のいるところに戻る。

「清彦君たち、一体どこへ行つたんでしょね？」榊が雛与に尋ねた。

「さあ？ その辺りを散歩でもしてるんじゃないですか？」横から静香が口を挟む。家の中なのに散歩という表現を用いたところが妙に可笑しい。

「また絵を観に行つたんですかね？」榊は煙草に火を点ける。それを見て静香は灰皿を彼の近くに寄せた。

「そんなことないんじゃないですか？ 亜季ちゃん、絵には興味なさそうでしたし」静香が答える。

「そうですね」雛与も静香に賛同した。「それにあそこの鍵は私と両親しか持つていないんですから、絵は観られません」

「実はあの二人、本当は付き合ってるのかもね」静香は目を細めた。

「そうかなあ？」雛与は首を傾げて呷く。

「だって亜季ちゃん、可愛いし……、少なくとも清彦君の方は気があると思うわ」

雛与は唸った。

「大事な弟を取られたくない気持ちはわかるけど、まあ観念しなさい」

「何？ それ？」思わず雛与は吹き出した。

それからすぐに清彦と亜季は広間に戻ってきた。

「どこに行つてたの？」可笑しそうに静香が尋ねる。

「ちょっとお手洗いの場所がわからなかったの、椿木君に案内してもらつていたんです」亜季が答えた。

「ふうん」悪戯っぽい笑顔で静香は意味深な相槌をうつ。

再び入り口に気配を感じたので雛与はそちらに視線を送った。すると広間に入ってきた敦子と目が合ってしまった。

「ちょっと雛与、答めるような口調で敦子は雛与に声を掛ける。

仕方がなく敦子の方に近づいた。

「何ですか？」

「貴女、さっきアトリエに行つたそうじゃない」

「ええ」できるだけ表情を変えないようにしながら雛与は答える。

「どうして貴女はいつもそう勝手な行動をとるの？」呆れたという調子で敦子。「アトリエを見たいのなら私がお父様に許可を貰いなさいと言つた筈よ」

客人に気を遣つてわざわざこちらから近づいたのに、そんな

大きな声を出したら意味がないではないか。雛与は母親に腹を立てた。

「そんな勝手な行動ばかりならもうあそここの鍵を返しなさい」

「このアトリエの鍵は私がお祖父ちゃんに貰った大切なものです」  
「厳しい口調で雛与は言い返した。」

「そうですね。それでも貴女はこの家を出ていった人間でしょう？」

この家のも自由に触れる権利など貴女にはありません」

「ちよつと待って」清彦が二人の間に入った。「アトリエにこうと言い出したのは僕なんだ。だから姉さんは悪くない」

「貴方は黙っていなさい」清彦を一瞥して敦子は言う。

一瞬、場が静まり返った。

その沈黙を破ったのは亜季だった。

「どうして雛与さんが勝手にアトリエに絵を観に行くことをそれほどまで嫌がるのですか？」淡々と亜季は尋ねた。

「え？ 貴女は……、えつと……？」ゲストからの突然の質問に敦子は戸惑っているようだ。

「私は柏樹亜季です」

「そう……、柏樹さんね……」敦子は亜季の返答を繰り返した。

「もしかして雛与さんの肖像画の件……、ですか？」

それを聞いて敦子はすかさず清彦を睨んだ。しかし清彦の視線は亜季の方を向いている。

「雛与さんの肖像画の件でそれほどアトリエを心配なさっているのですらその必要はありません」

「え？」敦子は呆気にとられた表情で亜季を見ている。「それは一体どういうこと？」

「だから私は、肖像画の件でそんなにアトリエを気になさっているのですら、それはいらぬ心配だと申し上げているのです」  
亜季は微笑んだ。「そんなものは初めから存在しないのですから」

この発言に再び広間は沈黙した。

今度沈黙を破ったのは敦子だった。

「えつと……、貴女は……」

「柏樹亜季です」さつきと同じ台詞を亜季はすかさず口にする。

「それはわかっています」先と違ひすぐに反応して敦子はむすつとする。「肖像画が存在しないとどういった意味でしょう？」

「そのままの意味です」亜季は言い切った。

「できれば……、その根拠をお聞かせ願います？」

「答えは簡単です」と亜季。「あのアトリエには人物画がありません。従ってあそこに雛与さんの肖像画がある筈がありません」

「それでは納得できませんわ」

「でしたら、清彦君の話を聞いてくだされば納得がいくと思います。」

敦子は清彦を見た。

「清彦、どういうこと？」 雛与は自分と敦子の上に立っている弟に尋ねた。

「柏樹さん……？」 清彦は亜季に問う。

亜季はにっこりと微笑んで返した。

「うん……清彦は俯いたまま申し訳なさそうにしている。「お祖父ちゃんが描いたっていう姉さんの肖像画の話、どこから出てきたか知っているよね？」

「お祖父ちゃんの日記に私の肖像画があるというようなことが書いてあったんでしょう？」 雛与は当然だという口調で言う。

「うん……、そうなんだ……。でもね……」 清彦は唇を噛んで上目遣いに雛与の方を見て言った。「実はそれ……、僕が書いたんだ……」

「は？」 敦子は目を大きくした。「それ……、どういうこと？」

「だから……、お祖父ちゃんの日記に僕が……、姉さんの絵を描いたって書き込んだの……」

くすくすと笑い声が聞こえた。雛与は哑然としながらもそちらを見る。

笑っているのは榊真琴。右手に持っている煙草がそれに合わ

せてゆらゆらと揺れていた。

「どうして……？」 榊を無視して敦子はきいた。「どうしてそんなことをしたの？」

「絵を売ろうとしてたから……。お祖父ちゃんが死んで……、お祖父ちゃんの描いた絵を全部売ろうとしてたから……」 清彦途切れ途切れに告白した。「あそこにある絵は……、僕や姉さんにとっては大事なものだ。だから……、あの絵が売られてしまうのが嫌だったんだ……。お祖父ちゃんはその絵を描かなかったから、あの中に孫の肖像画が隠れてるなんて知ったら……、そんな貴重な絵があの中のだれかだなんてことを知ったら……、きっとそんな簡単には絵を売り出そうと思わないだろうと思つて……」

9

数日後。

榊真琴はアパートの階段を三階まで上がった。自室のドアを開けようとしたそのとき、すぐ隣の部屋のドアがゆつくりと開く。先日アパートの駐車場で出会った夏奈芽はあの部屋の住人だ。

ドアから出てくる人間に挨拶をする為、榊は自室に入るの

を待った。

しかし部屋から出てきたのは見知らぬ女性であった。その女性はそのくさと柵の横をすり抜けて階段に向かってしまった。

軽く溜息をついてから柵は隣人の部屋のインターホンを鳴らした。

「あら、柵さん」ようやく見知った顔を目の前にする。

「こんにちは」柵は挨拶をする。「おもしろい話があるんだ。あがってもいい？」

「じゃあいつもはつまらない話なの？」

「いつもより少しおもしろい話」

「どうぞ」

入室を認められた柵はこの部屋の住人と共に部屋の奥に向かった。

「さっき出てきた彼女、新しいお相手だろうか？ 夏奈芽のこともあるし、もうそろそろまともな恋愛をしたら？」柵が言う。

「夏奈芽はまだ小学校にいるから大丈夫」彼女は微笑んだ。「それは素敵なご忠告？」

「ただのお節介」柵は右手を挙げて素っ気なく返した。「いや、いわゆる余計なお世話ってやつかな？」

それを聞いて柏樹亜季はにっこりと微笑んだ。

「話って？」椅子に腰掛けた亜季は尋ねた。

「この前の椿木のパーティの話だよ」煙草に火を点けながら柵は答える。「どうしてあんな嘘を？」

「嘘って何のことかしら？」亜季はくすくすと笑って目を細めた。

「清彦君の言っていたことは嘘だろうか？」柵は言う。「難与さんの絵はあった」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「ただの勘」柵は口許を斜めにした。

「ふうん」亜季はコーヒーの入ったカップを手にして言う。

「じゃあ質問を変えるわね。どうしてあの絵を盗んだの？」

「何のことだい？」

「惚けるの？」

柵は何も言わない。

「一度私たち、絵を観に行っただしょう？ あのとときよ」

「何かあの絵に問題があったかな？」あつさりと諦めて柵はきく。こういった方面に関しては、どちらかというと比較着質である。

「あの絵だけ様子がおかしかったもの」亜季は説明する。「他の絵と比べて明らかに質感が違った。だからこれは誰かさんがこの絵を盗んで、気が付かれないように代わりに置いていったものだってわかったの。ちゃんと偽造の手法を変えないと駄目

よ」

「本当は君に頼もうと思つてたんだ」榊は両手を頭の後ろに回した。「依頼のあつた日にあの絵の写真を撮つておいたんだ。

それをモデルにして、パーティの当日までにごうにかあれを作成したんだけど……、やっぱり君が造つたものの方が精巧だね」

「それはそうよ」あつさり亜季は頷く。「でもそんな犯罪行為に私を荷担させないでね」

その答えに榊は鼻を鳴らした。

「それにしてもいつ盗んだの？」

「当日、パーティが始まる前に調査という名目でアトリエを見せてもらつたときだよ。榊さんの目を盗んで絵をすり替える

のはなかなか大変だつただけど……、そういえばあの日、駐車場で夏奈芽に出会つてね、部屋まで運ぶのを手伝ってもらおうかと思つた」

「夏奈芽にそんなことをさせると、夏奈芽の父親に何を言われるかわからないわよ」

「今後とも気を付ける」榊は夏奈芽の父親を思い出しながら微笑んで言つた。

「どうしてあの絵を盗んだりしたの？」

「あの絵がひどく気に入つたから……」

「ふうん……」といかにも信じていませんといった調子で亜季。

「それに絵を観たときに予想したことを確認したくてね。まあ予想どおり裏面にはちゃんとタイトルが記してあつた」

「何という題名？」

「雪と花火」自分が答えなくても亜季にはわかつているだろうと思つたが、それは口にはしなかつた。

「ふうん」亜季はつまらなさそうに言つた。「『雪と花火』か『花火と雪』だろうとは思つたけど……。やっぱりあれが雛与さんを描いた絵だつたのね」

「そうみたいだね」榊は頷く。「ところで、まだ僕の質問には答えてもらつてないよ」それから榊は煙草を灰皿に当てた。「どうして清彦君にあんな嘘をつかせたの？」

「この前大学でね、榊木君に相談をされたの。両親は問題の肖像画の存在を知つてから今まで以上に雛与さんを傷付けてる。それで肖像画のことを忘れてもらう為にはどうしたらいいかって。あれ、実は当日思い付いた嘘だから二人ともアドリブだったのよ」

「あの清彦の芝居の少し前に亜季と清彦が広間にいなかったことを榊は思い出した。きつとあのときにも打ち合わせをしていたのだろう。」

「しかし本当に驚いたよ。あんなところで君に出会ふなんて」

「日頃の行いのおかげよ」亜季は自分の髪に手で触れながら言

う。

「日頃の行いのせい、じゃなくて？」

「ねえ？ どこにあるの？」榎を無視して亜季は尋ねた。

「日頃の行いがかい？」

「あの絵よ」

「なんだ、そのことか」榎は頷く。「それだったらもちろん僕の部屋」

「この部屋のすぐ隣の部屋のこと？」

「ききにくいんだけど……、それは新しいジヨークかな？」

「普通に尋ねてるつもりだけど」わざとらしく怒ったような表情で亜季。

「あそう。もちろん、このすぐ隣の部屋にあるよ」

亜季はそれを聞いて安心したようににっこりと微笑んできた。

「今から観に行ってもいい？」

「ああ、構わないよ。だけど……」榎は真面目な口調できいた。

「どうして今更僕の部屋を見たいの？」

(J)

# 幻想の中の真実

荒川史朗

そもそも、ここに来ることになったのは一枚の記事を見たことがきっかけであった。その記事には、

「大金を欲する死者求む。」

とだけ書いてあった。繁華街の地下にある、さびれたバーで見つけた張り紙だった。いつもだったらくだらないとはき捨てるものの、このときの烈雄はいつもと違った。その言葉に惹かれたのだ。自分には何かが足りない。今までの人生、上の下くらいに思っ生きてきたが、それより上に行くことはできなかった。だが、何でも無難にこなし、争いは避け、そうしてきただけ自分に不満などなかった。しかし、人生で大成功を収めている勝ち組みの人たちは、少なからず修羅場をくぐり抜けてきている。それ故に成功を収めることができるのだ。自分にもっとも足りないものは修羅場だ。この張り紙を見たとき、そういつた修羅場の匂いを直感的に烈雄は感じた。自分も勝ち組みになれるかもしれないという淡い期待が烈雄を動かしたのだった。烈雄はすぐに張り紙に書かれた番号に電話した。説明はいたって簡単で、明日の九時に〇〇ビルの五階に来ること。そこに烈雄の求める修羅場があるというのだ。そして最後に「死を恐れないのなら、是非ご参加ください。」

と一言付け加えられた。望むところだ、と烈雄は思った。このときの烈雄が死を恐れていなかった訳ではない、考えていな

かったのだ。死という単語が何度出されても、その意味を深く考えることを本能的に避けていた。人間が誰しも持っている保留癖、つまり今という時間が永遠に続くという恐ろしいほどの思い込みが、烈雄に死を考えるのをやめさせていた。その死を後々痛いほど思い知らされることになるのは、この時の烈雄には知る由もなかったが…。

翌日指定された場所に行くと、何だか長つたらしい書類にサインをさせられ、一つの個室に案内された。そこには既に五人の人物がいた。烈雄はその中に幼馴染の美喜の姿があるのを見て、とても驚いたが、何食わぬ顔をして、空いている席に腰を降ろした。室内はしんと静まり、全員前に立っているスーツの男を見ていた。一列に並ぶ椅子は七つあり、一つ空席があったが、男の話は時間通り始まった。

「ようこそお集まりくださいました。早速ルールの説明をします。まず初めに今回の賞金ですが、勝者の方には十億円を差し上げます。」

唐突に『十億円』という一言が耳に入り込む。全員が耳を疑った。大金とはいってもせいぜい一千万円ほどを予測していたのだろう。まさかその百倍とは…。期待と同時に不安も生じるの

は無理がない。

「これからあなた方全員に一つの部屋に移っていただきます。そこで今日の午前十時からちょうど四十八時間後、つまり二日後の午前十時までに各自『ノルマ』を達成していただきます。

ノルマは私たちの方で勝手に決めさせていただきました。『毎日十時間以上睡眠をとる。』、「全ての食事を時間通りにとる。」などといった行動がノルマの内容になっています。それを一人ずつ、性格を考慮したうえで、設定いたしました。

部屋の中では基本的に自由行動になっています。食事をとるのも自由。寝るのも自由。ただし、毎朝十時に行なわれるミーティングには全員参加してください。

ノルマを達成した方は、ミーティングの際に申告してください。ただし、ノルマを達成し、申告しただけではクリアになりません。申告があった時点で、他の皆さんには、その人のノルマの内容を当てる回答権が与えられません。

誰にもノルマの内容を当てられなかったら、申告者はクリアとなります。逆に誰かがそれを当てたら、その人のクリアとなり、申告者には死んでいただきます。もちろん、回答して不正解だった場合には回答者に死んでいただきます。回答をする、しないは皆様の自由です。自信のある方だけお答えください。」

「ちよつと待って！」

美喜の声が響いた。

「どうしました？」

「今このゲームを降りたい……といつても無理なのでしょうね。」  
「物分かりのいいお嬢さんですえ。ここまで聞いていただいたからには全員、ゲームに参加していただきます。途中退室は認めません。」

体の大きな男たちが出入り口をしつかりと固めている。烈雄はこんな状況になって、初めて死を恐れていた。思わず自分の浅はかさに呆れてしまう。しかし、この中の人たちの一体何人がここまでの内容を予測していたのだろうか？ 少なくとも抵抗する者はいなかった。本当に全員死ぬ覚悟ができていたのか？ あまりに突然すぎる。いや、物語の始まりはいつでも、突然起こるのだ、と烈雄は考えると同時に、自分の保留辯を責めた。

「説明を続けます。基本的なルールは以上となっていますが、特例が二つほどあります。

まず一つは、2日後の十時に生き残っていた場合です。この場合は無条件で残っている全員に死んでいただきます。

次に、一人だけ生き残った場合です。この場合も死んでいただきます……と言いたいところですが、それは少々厳しすぎでしょう。最後の一人になったときは、その時点で、『ノルマ』が

達成、されていたら、クリアになります。」

「『ノルマ』ってのはいつ分かるんだ？ くじ引きでもするの  
か？」

そう言ったのは隣に座っている筋肉質の男だった。歳は二十  
前半といったところであろうか。体格はゴリラと並んでも引け  
をとらないような体つきだ。

「それは皆さんを部屋にご案内した後に、カードに書いてお渡  
しします。ノルマの内容はすでに決まっていますのでご安心くだ  
さい。皆さんそれぞれに公平なノルマを設定してあります。他  
に何か質問は？」

誰も手をあげない。

「では、以上で説明を終わらせていただきます。今後の質問は  
私の部下を部屋に置きますので、そこでお尋ね下さい。それで  
は時間になりますので、部屋へのご案内いたします。」

部屋に案内され、全員入ったところで、黒服の男によりドア  
が閉められる。時計の針は十時ちょうどを指していた。部屋は  
広いリビングとなっていて、テーブルと椅子のみが置かれてい  
る。奥を見ると等間隔に八つのドアが並んでいた。一番右は「便  
所」と書いてあり、他の七つの部屋にはそれぞれ名前が書いて  
ある。烈雄の名前は左から二番目にあった。殺風景な部屋だっ

た。六人は無言でリビングの椅子に腰掛けた。黒服の男がドア  
の前に立つ。そしてしばらくの間、沈黙が続いた。

「私たちの誰が死ぬのかしら？」

美喜の言う言葉が、重くのしかかる。初めの一言は予想以上  
に現実的なものだった。その場にいる誰もが考えていることを、  
ここまでさらりと saying てる彼女は、烈雄の目にはとても魅  
力的に映る。考えてみると、美喜は昔からこうだった。

中学校の頃、烈雄の教科書が無くなったことがある。とはいっ  
ても別に珍しいことではない。犯人はもちろんいじめっ子の中  
山だ。そんなことは全員、言わずとも分かっているが、自分が  
いじめの対象になるのがみんな怖く、口を閉ざしていた。中山  
はげらげら笑いながら、教科書を探す僕を見ている。みんなも  
苦笑いをする。お決まりのシヨウの始まりだ。

「いいかげんにしなさいよ！」

突然、教室中に響く声。声の主は美喜だった。

「何でそんなに烈雄ばかりいじめめるの？ 烈雄のことが好きな  
らもっと別の方法でアプローチした方がいいと思うけど？ 愛  
情の裏返して今どき流行らないと思うわ。」

教室中の空気が変わる。さっきまでびくびくしていた連中  
が、隠れてくすくすと笑っているのだ。何も言えなくなった中

山は美喜をにらみつけながら、教室を出て行った。美喜の完全勝利だ。美喜が僕の方に歩いてくる。てつきり、「あんたがそんなだからいじめられるのよ！ 男なんだからしつかりしなさい！」とお決まりの台詞でも言うのかと思ったら、

「余計なことしてごめんね。」

と両手を合わせ、軽く舌を出したのだ。これには僕も驚いた。天使の笑顔というよりは、晴れた日の青空のような、すがすがしい笑顔だった。

余談になるが、この日以来、中山がホモ扱いをされるようになったというのは、なかなか笑える話だ。そして烈雄の興味が咲原美喜に向けられるようになったのは言うまでもない。

昔恋した女性とこんな形で巡り合うのだから、運命とは皮肉なものだ。今でも美喜の魅力は衰えていない。むしろ、以前よりも一層魅力的になったように感じる。だがこの状況では全く関係のないことだ。烈雄は考えるのをやめて、現実を見つめなおす。美喜の言葉による沈黙が続いていた。

「とりあえず、皆さん、お互いに名前を名乗りませんか？」

そういったのは眼鏡の男だった。年は三十前後といったところだろうか。非常に痩せていて目つきの悪い男だったが、その見た目とは裏腹に、彼の言葉には温かみがあった。

「この状況でその行為に何の意味がある？ ふん、くだらない。」

隣の小太りの男が発言する。発言といっても、とても小さな声で、聞き取るのが精一杯だ。こちらは逆に、愛嬌のある顔をしているが、言うことがなかなか厳しい。

「私もそう思います。こうなった以上は、自分の一挙一動に気を遣わなくてはいけないのですから、自己紹介などの行為は控えるべきです。」

もう一人の女性が口を開く。この女性は学級委員長タイプといえるだろう。なかなかの確な意見である。美喜と容姿は全く違うが、中身は似ているかもしれない、と烈雄は漠然と考えていた。発言するときの雰囲気、どうにも似ているように感じるのだ。最も違うのは、顔である。美喜は決して美人ではないが、愛嬌のある顔立ちをしている。十人のうち、九人はかわいいと答えるだろう。それに比べるとこちらの女性は、言い方は悪いが、十人のうち一人でもかわいいと答えたら、その人は間違いなく、趣味を疑われてしまうだろう。顔で人を判断するのはいけないとは分かっている、そう考えてしまうのは、可愛い女性がこの世で一番得をすると思っっている烈雄には仕方ないことだった。

「自己紹介はちゃんとしろ。それがルールだ。」

そう一言だけという黒服の男はまた口を閉ざした。

「それでは、俺から自己紹介をしよう。俺は島崎拓哉。ここにきた理由は……言わなくてもいいだろう？」

そう言うと、先ほど質問をしていた、島崎という筋肉質の男は黒服の男を見た。黒服の男は何も言わない。

「というわけで、それは伏せておこう。俺はどんな手を使ってでもこの部屋を出る。文句は言わせねえ。」

緊張が走る。もちろん、どうぞよろしくなどの言葉がでないことは予測していたが、こうも挑戦的になるとは驚いた。実力行使に出られたら、誰も文句は言えないな、と列雄は思った。

続いて自己紹介をするのは、小太りの男だった。名前は宮下健二というらしい。同じようなことを何度も言っていたようだが、声が小さく、何も聞こえなかった。

「自分が死ぬのは嫌だが、被害は最小限に抑えたい。」

そんな綺麗事を最後に付け加えたのは、痩せ型の白衣の男、玉木瞬だった。玉木という名は、その名が原因で幼少の頃にいじめにあつていてもおかしくないが、昔の僕の先輩である『玉虫』という苗字の人よりは幾分ましだろうと、くだらないことを列雄は考えていた。

「木原美沙希。以上。」

こう一言だけ言った女性は、自己紹介は控えるべきだと言っ

ていた学級委員長タイプの女性だった。自分の発言通り、簡潔に済ませている。

「咲原美喜よ。ここにはお金が欲しくて来たの。絶対に生きてここを出るわ。」

はつきりとした口調だった。虚勢ではなく、力強さを感じさせるものがある。島崎は美喜を見てにやにやしている。同じように玉木も美喜を見ている。彼女の魅力はさすがだと列雄は思った。

「僕は峰崎烈雄。二十五歳の会社員だ。」

なぜ自分を明かしたのだろうと烈雄は思ったが、誰もそんなことは気にも留めていないようだ。

これで全員の自己紹介が終わった、と思ったところで、初老の男が息を切らせてやってきた。

「ふう……。遅れてすまない。私の名は清水清十郎だ。これで全員かな？」

黒服の男は頷いた。

「まだあなたの名前を聞いていないな。ルールなんだろう？」

島崎が黒服の男につっかかる。黒服の男は一切動じずに、

「黒田だ。お前たちの見張りをやらせてもらう。」

と答えた。ようやく七人の男女（と黒田）が全員揃った。そ

して物語の始まりを意味する七枚のカードが全員に配られた。

カードが配られ、各自それを見るとポケットにしまった。顔色を変えるものはいない。この時点で心理戦は始まっていた。

「食事の時間は十時、十三時、十九時となっている。ここに食事を用意しておくので、食べたい者は時間になったら来い。ただし朝の十時はミーティングがあるので、全員必ず参加すること。あとは全て自由だ。奥にある名前の書いてある部屋は各自好きに使ってくれ。」

黒田はそう言うと、また黙ってしまった。

時刻は十一時五分前。一通りの儀式は終了した。

「そうしたら、あと二時間ほどで昼食ですし、全員部屋に行きましようか。いろいろ考えることもあるでしょうし。」

その玉木の意見には全員が賛成だった。ばらばらと部屋に入って行く。部屋割りは左から順に木原、峰崎、玉木、咲原、宮下、島崎、清水となっていた。気がつくどリビングには烈雄と美喜の二人だけが残された。

「久しぶりね。覚えてる？」

そう言うと、美喜は軽く微笑んだ。覚えているに決まっている。昔あれほど好きだった女性だ。いや、今でも一番烈雄の心に残っている女性である。中学を出て色んな女性と付き合った

烈雄であったが、どの女性も美喜と比較してしまっていた。そして烈雄の中では、結局、彼女を超える女性は現れなかったのだ。最も美喜に対して烈雄は、付き合うどころか、告白さえしていなかったのだが。

「ああ、覚えているよ。中学校の卒業式以来だね。君は成人式の同窓会にも来なかったから。」

「そうね。あの頃は色々あったから……。積もる話はあとにして、私たちも部屋に入りましょうか？」

「そうだね。」

色々という部分が多少引かかったが、烈雄は気にせず部屋に入った。

こうして全員が部屋に入った。烈雄は部屋に入ると同時に、驚いたことが二つあった。まずこのドア全体がマジックミラーになっていたということだ。リビングから見ると、ただの鏡にしか見えなかったが、こうして中から見ると、リビングの様子がよく分かる。そしてもう一つは、こちらの方が驚いたのだが、この部屋にはカギが無い。いつ誰がドアを開けてもおかしくなっていくことだ。そこに若干の不安を覚えた。部屋はとても狭かった。部屋には、ベッドと小さな袋と冷蔵庫のみ置かれていた。シャワーはどこにもなく、その代わりに小さな洗面所がベッ

ドの脇に設置されていた。まず冷蔵庫を開けると、缶ビールが十本、ミネラルウォーターのペットボトルが十本入っていた。どちらも五百ミリリットルだ。次に袋を開けると、中にはナイフ、拳銃、薬品の三つが入っていた。ナイフは女性にも使えるような小型のものであったが、余程使い慣れている人でないと、これを使って人を殺すのは難しいだろう、と列雄は思った。拳銃には何か見慣れないものが付いていた。テレビで見たことがある。おそらくサイレンサーと呼ばれるものだろう。これを付けていれば銃声が全くしないという優れたのだと聞いたことがある。弾は六発中三発込められていた。薬品はラベルが貼ってあり、『青酸カリ』と書いてある。強烈な毒薬だ。少し飲めばあつという間に死に至る。ここまでくると、この道具が人殺しのために用意されたということはバカでも分かる。しかし、このナイフだけを使うのが難しそうだ。日本刀ならまだしも、こんな小さいナイフで人を殺すのは、あのメンバードと、力のありそうな島崎くらいしかできない芸当だろう。ふと、高校の頃クラスに日本刀を持ってきて記念撮影をしていた悪友を思い出す。あの日本刀だったら、楽に人を殺せるのに……。列雄はそんなことを考えながら、ベッドに寝転んだ。

これからどうするべきだろう……。当然思考はそこに集中する。十億と自分の命がかかっている以上、全員が同じことを

考えているだろう。まず、ここを出るにはノルマを達成するか、誰かのノルマを当てるかの二つ。どちらが安全とも言えないが、ノルマを当てるという行為は誰かがノルマ達成を宣言しない限りできない、ということを考えると、ノルマの達成を第一に考えるべきだろう。さらに、ノルマを達成していれば最後の一人になってもクリアになることから、ノルマは達成していて損はない。ここまでは当然、全員が考える。

もう一つは、協力すれば全員が助かることができる、というところだ。全員がノルマを達成し、一人抜け、また一人抜け……。最後の一人もノルマを達成して抜ける。そんな簡単な方法で全員が十億を手に入れて良いのか？

そんなことが許されるわけがない、と列雄は思った。この先死人は出るのか？ 出るとしたら誰が最初に死ぬのか？ それはこの時点では神のみぞ知ることだった。

時計の針が十二時四十分を指す。列雄がベッドに寝転がりながらドアの方を見ると、清水の姿があった。部屋からは、ドアの近くではリビングの八割が見渡せたが、ベッドから見ることでできるのは、リビングの五割程度で、列雄のベッドからでは、リビングの真ん中にあるテーブルの半分が、ぎりぎり見えるくらいだった。清水は列雄の視界に入っては消え、入っては消え、

と繰り返していた。どうやらリビングの机の周りをうろろし  
ているようだった。遅れてきた清水は落ち着きのない人物のよ  
うだ。そろそろ食事かなと思いい、部屋を出ようとした次の瞬間、  
列雄の目に映ったのは、床に膝ますく清水の姿だった。そして、  
女の悲鳴が聞こえる。声の主は隣人の木原のものだった。列雄  
がその悲鳴を聞き終わる頃には、清水は床と接吻をしていた。

清水の姿を見て、列雄は急いでドアへと向かった。列雄がド  
アを開けると、頭から血を流す清水の姿と、それを見て青ざめ  
る木原の姿があった。木原は彼女の部屋のドアの正面に立つて  
いたため、列雄の部屋の中からはその姿を捉えることができな  
かったようだ。そして、他の四人も部屋から出るなり、清水の  
姿を見る。列雄は清水に寄って行ったが、息は既になかった。

「…死んでいる。銃で頭を撃たれたようです。状況から考えて  
殺人に間違いないと思います。」

そう列雄が答えると、全員は沈黙した。こうなるであろうこ  
とは、全員が予期していたため、驚く者はいなかった。しかし  
あまりにも唐突な出来事だったので、列雄は冷静を装っては  
いたが、頭の中は混乱していた。

「問題は誰が殺したか、だな。全員の部屋に銃があったのだろ  
う？」

そう言ったのは玉木だった。全員その言葉に頷く。そして島

崎が口を開いた。

「犯人探しかい？ 探偵にでもなったつもりか？」

「そういう訳ではない。ただ、誰が殺したかを知るのには重要だ。  
そいつの『ノルマ』が分かるかもしれない。」

その通りである。ここで殺人が起こる以上、ノルマが関わっ  
ている可能性が非常に高い。玉木のその返答は誰もが納得する  
ところであった。

「ただ、早速、一発しかない銃弾を使うなんて、せつちちな奴  
がいたもんだ。」

「…！」

島崎の言葉に衝撃が走る。

「銃弾の数は全員同じではないのか？ 私は三発入っていたが

…。みんなは？」

玉木の言葉に返答するものはいなかったが、反応を見る限り、  
全員の銃弾の数は違っているようだった。

「なるほど。そういう意味の『公平』ね…。全く良くできてい  
るわね。私の銃弾の数は、公表することはできないけど、あな  
たがたよりは多いわよ。それから、先ほどの一部始終はそちら  
の黒服さんが全部見ているのではないかしら？ もっとも教え  
てくれそうにはないんですけどね。」

美喜がそう答えることで、これ以上の議論は無駄だと感じた

のか、全員が口を閉ざした。もつとも、木原と宮下は端から口を開く気がなさそうだが…。

「誰が殺したかは各自が考えてみればいい。とりあえず、清水さんの『ノルマ』を見てみませんか？ 今後の参考になるかもしれない。」

烈雄の提案には全員が賛成だった。代表として、烈雄と玉木が清水の死体を探る。カードはズボンのポケットに入っていた。そこには『島崎の死体を見る』と書いてある。全員が島崎の方向を向く。

「何見てるんだ！ そこに俺の名前があつても不自然ではないだろう？」 むしろ、俺は全員を殺して、ここを出ても構わないんだぜ？」

島崎はそう言うと、不敵に微笑んだ。

「とりあえず、食事をしよう。黒田さん、こちらの死体は片付けてもらえるのだろうか？」

玉木がそう言うと、黒田は軽く頷き、ドアを開けて外に出た。しばらくすると、先ほどの説明会のときに、ドアに立っていた男二人の他に、エプロン姿の女性を二人連れて、黒田が帰ってきた。女性は手に料理の皿を持っていた。二人の男が死体を片付けている間に女性二人が食事を用意する。手際の良い作業だった。そのおかげもあり、一時を少し経過した時点で食事を

とることができた。

「気分が悪いので部屋にもどる。」

そう言うと、宮下は食事に手を付けず、部屋に戻った。

「もったいないわね。こんなに美味しいのに。」

美喜が言う。烈雄は軽く頷いた。この殺風景な食卓に出される料理の味は、見事なものだった。

「ダイエツト中かな？ 最も、あんなものを見た後に食事をできるのをおかしいのだろうか？」

あんなものとは当然死体のことだろう。島崎の言うとおり、まともに食事をしているのは、島崎と美喜だけだった。他の三人は軽くおかずをつまむ程度で、それ以上は口に入れなかった。

食卓に半分以上の料理が残っているのにも関わらず、食事の時間は終了した。食事が終わると同時に、美喜は烈雄に話しかけた。

「積もる話でもしない？ 一人でいると、気が狂いそうだわ。」

「構わないよ。いい気分転換だ。」

「私も少し加わっても構わないですか？」

そう言ったのは玉木だった。相変わらず、見た目とは裏腹に、温かいしゃべり方だな、と烈雄は思った。

「全然構わないわ。それならこのテーブルでお話ししましょう

か。」

料理の片付いたテーブルを見て美喜はそういった。木原がこつちを見ていたので、誘ってみたが、彼女は「結構です。」と言つて部屋に戻つた。

話の内容はただの世間話だったが、他の二人のここに来た理由を聞いて、烈雄は自分を恥ずかしく思った。美喜はここに来たのは借金が原因だったらしい、とは言つても自分の借金ではなく、姉の借金によるものだった。姉の借金の保証人になると、姉は姿を消し、多額の負債を美喜が負うことになった。金利が膨れ上がり、まともに働いて返せるお金ではなかったので、ここに参加したというわけだった。悲劇のヒロインのようだが、美喜はそんなことは気にせず淡々と話した。一方、玉木は離婚の慰謝料によるためだった。分かれた妻に多額の慰謝料を請求され、そのためにここに参加したというわけだ。誰しも理由をもって参加している中、ただ漠然とここにいる自分に烈雄は恥ずかしく思ったのだつた。

話が一段落する頃には、三時を回っていた。

「それでは私は部屋に戻り、一眠りします。あとは、二人でゆっくりどうぞ。」

気をきかせたのかどうかは分からないが、そう言つて玉木は部屋に戻つていった。二人の会話が続く。

「烈雄君は度胸があるわね。私だったら、修羅場なんて求めないわ。安定した生活が欲しかった。烈雄君は、奥さんとかいないの?」

「どうにも出会いがなくてね。美喜は?」

自然と『美喜』という呼び名が出た自分に烈雄は驚いた。

「私は婚約相手に逃げられたわ。借金が原因でね。」

「お姉さんを恨んでる?」

「いえ、私の中の姉はいまだに優しい姉なの。お人よしかもしれないけど、姉が私を置いて消えたのには訳があると思つているんだ。バカな話だけどね。」

美喜の目に悲しみがよぎった。強気な女性の内面を覗いてしまったようで、烈雄は何だか照れくさくなつた。

「美喜がそう思うなら、そうだと思つてよ。大切な人は心の中にだけいればいい。例えばそれが幻想でも。」

「詩人ね。」

美喜は軽く微笑む。

「一緒に出られるといいね。」

烈雄は心の中で不可能だとは思いつながらも、そう言わずにはいられなかつた。

「…そうね。」

そう言つと、美喜は立ち上がった。

「相手をしてくれてありがとう。大分楽になったわ。」

そう言うと、美喜は部屋に戻っていった。一人残された烈雄は、その場で煙草を一本吸うと、部屋にもどった。

烈雄は、時計を見ると、既に四時を回っていた。夕飯まで一眠りしようかとも思ったが、ベッドに入っても眠れなかった。烈雄は自然と美喜のことを考えていた。あの頃からずっと美喜が自分の側にいてくれば、ここにはいなかったのではないだろうか、などどくだらないことを……。烈雄が求めていたものは、修羅場よりも守るべき存在だった。守るべき存在があることで強くなれると思っていた。それと同時に守るべき存在に守られたい、自分が泣きたいときにそっとハンカチで涙を拭ってくれる存在を求めていた。そうして、自分の存在意義を見出したかったのだ。烈雄はそれまでの人生を一人で生きてきたつもりだったが、自分の存在意義を他人との関係でしか見出せずしていた。そう考える度に美喜の顔が頭に浮かんでくるので、烈雄はそれを振り払い、現状を見つめなおした。

とにかく、最初の殺人で『協力して全員が助かる』という方法が不可能になったのは、誰の目から見ても明らかだ。あとは自分の力を信じるのみだった。安全にこの部屋を出ることはできない。どうやって脱出するべきか？ 烈雄はこの問題を解くことに試行錯誤するが、適応できそうな定理はどこにも存在し

なかった。烈雄の思考は迷宮入りへと向かっていった。

ドアの前に立ち、黒田は軽く微笑んだ。自分、は、全、て、知、つ、て、い、る。それが、黒田にはたまらなく心地よかった。全員が部屋で思考を繰り返す中、その答えを知っている自分が超越者のように感じられるからだ。全員の行動を把握し、管理するというその仕事は自慰行為にも勝る満足感だった。十九時が近づくにつれて、リビングに人が集まる。その烏合の衆を見て、微笑を堪えるのに黒田は必死だった。

今度は七時には食事が全て用意されていた。しかし、その場には四人しかいなかった。見当たらないのは、玉木と木原の姿だった。不思議に思った四人は島崎・宮下、烈雄・美喜の二組に分かれ、それぞれが木原、玉木の部屋へと向かった。

烈雄が玉木の部屋をノックすると、返事がなかった。不安に思い、部屋に入った。ドアを開けるとベッドの布団にふくらみがあった。微動すらない、その光景を見て、烈雄と美喜は早速でベッドに向かった。すると、その途中で、ふくらみから玉木が起き上がった。

「もう夕飯ですか？ すいません、つい眠ってしまいました。」  
『つい』という割には、かなり本格的に寝ていた気もするが、

玉木が無事にしゃべっている様子を見て、二人は安堵した。そのときに遠くの部屋から声がした。

「おーい！ ちょっと来てくれ！」

島崎の声だった。烈雄と美喜は寝ぼけ眼の玉木を置いて、木原の部屋へと向かった。部屋に着くと、奥にいる島崎たちの間に二人は割って入った。

そこにあるのは木原美沙樹の死体だった。頭から血を流しているが、清水の場合と違うのは、死体の横に銃が転がっているところだった。

「二人目か…。まずはノルマを確認しましょうか。」

そう言うと、玉木は美喜の方を見た。死体とはいえ、さすがに女性の服を調べるのには抵抗があったのだろう。美喜はそれを察知し、木原の服を調べた。簡単にカードは見つかった。そこには『自殺』とだけ書いてあった。

「『どういことだ？ あまりに理不尽なルールじゃないか！』  
そう言ったのは玉木だった。このカードには、少なからず全員驚いているようだ。」

「僕は最後に木原さんが部屋に入るのを見ました。そのあと自分の部屋のベッドにずっといましたが、ドアの前は誰も通らなかつたと思います。」

烈雄がそう答えると全員険しい表情をした。木原の部屋に行くためには、烈雄の部屋の前を通らなくてはいけない。そことは全員が分かっていた。

「それじゃあ…自殺？」

美喜が悲しげに答えた。

「今の時点ではそう考えるのが妥当だろう。」

玉木も悲しげな表情を浮かべてそう答える。

「そっちの兄ちゃんが嘘を付いていなければな。」

そう言い放ったのは島崎だった。誰も何も言わない。

「これ以上の議論は無駄だ。私は部屋に戻る。食事はいらぬ。」  
そう言うと、宮下は部屋へと向かった。またしても宮下は食

事をとらぬらしい。意外とナイーブなんだな、と烈雄は思った。残る四人は大した会話もせず、リビングへと向かった。

それまでも会話がはずんでいるというわけではなかつたが、今回の食事中は、誰も一言も発さなかつた。そして、そのまま全員は部屋へ戻っていった。時刻は八時を回ろうとしている。ようやく長い一日目が終わろうとしていた。

烈雄は部屋に戻るなり、煙草に火を付けた。本当は煙がこもるため、リビングで煙草を吸いたかつたのだが、これ以上あの空間にすることに堪えられなかつたのだ。隣の部屋から物音が聞こえる。おそらく木原の部屋を黒服軍団が片付けているのだ

る。今日で二人死んだ。全く実感が無いというわけではないが、二人の死は、烈雄には何の感情も抱かせなかった。ポケットからカードを出して、枕の横に放り投げる。

「はかばかしい。」

そうはき捨てると、烈雄は眠りについた。

ノックの音で烈雄は目を覚ました。時計を見ると、時間はすでに十一時だった。

「入ってもいいかしら？」

美喜の声がドアから聞こえる。

「どうぞ。」

そう答えると烈雄はベッドから体を起こした。自分が寝起きの良いほうで良かったと思う。世の中にはどんなに起こしても目を覚まさない人物がいるらしいが、それが信じられないのと同時に、自分がそうでなくて良かった、と烈雄は思った。

美喜はドアを開け烈雄の近くに歩いてきた。烈雄にとつて、美喜がこの部屋に来るのは誤算であったが、嬉しい誤算だった。

「どうかしたの？」

烈雄は冷静に答えたが、それは表面だけだった。

「お話をしたかったの。迷惑だったかしら？」

「そんなことないよ。座ったら？」

烈雄はベッドの端により、美喜の座るスペースを作った。美喜が座ろうとしたときに、美喜の視線が枕もとにうつつたのを烈雄は見逃さなかった。そこには放り投げたカードがあったからだ。烈雄が急いでそれを隠すと、美喜は申し訳なさそうな顔をした。

「見た？」

「うん…少しだけ。」

烈雄は焦った。少しというのは、どの程度を表すのか分からなかったからだ。

「何て書いてあった？」

「初めの方は見えなかったけど、『…の死体を見る』ってところだけ見えてしまったの。ごめんね。」

「謝ることないよ。僕の不注意だから。」

全部を見られた訳ではないことに、烈雄は安心した。

「それでどんなお話かな？」

烈雄は唐突に話を切り替えた。美喜はすぐに意識を切り替えて、烈雄の質問に答える。

「今後のことが心配になったの。あなたはどう思っているのか聞きたいわ。」

先ほどのカードのことは気にもしていないように見える。いや、気にしない素振りをできる美喜の優しさにもまた、烈雄は

惹かれているのである。

「木原美沙希さんは姉さんだよね？」

「……！」

美喜は明らかに驚いた様子だった。まさか気付かれているとは、夢にも思っていなかったようだ。

「何で分かったの？」

「いや、はっきりと分かっていた訳ではないけど……雰囲気かな。二人の喋る光景がどことなく似ているように感じたんだ。初めはそれだけだったけど……。美喜からお姉さんの話を聞いたときに、何となくそうかなと。」

「それだけ？」

「あとは……決め手はアナグラムかな。」

「やつぱりそこに気付いていたのね。中学の頃に神童と呼ばれていただけあるわね。」

美喜は微笑んだが、それは列雄にとっては思い出したくない呼び名だった。少し勉強ができるからといって、神童などと呼ばれてはバカにされたように感じるからだ。アナグラムとは文字の入れ替えで、『さきはらみき』を並び替えると『きはらみさき』になるということだけであった。そんなこと誰でも気付くかと思っていたが、そうでもないということを美喜から聞いて、列雄は驚いた。

「『木原美沙希』という偽名を使って、美喜に姉の存在を気付かせたかったのかな？」

「おそらくそうでしょうね。最も気付いたときには、話もできない状況だったけど……。」

「いつ気がついたの？」

「私は初めから疑ってはいたけれど、確信を抱いたのは死体を見たときだわ。それまでは近くでじっと見ることはなかったから……。顔も変わっていたし、気付かないのも無理ないわ。アナグラムも偶然の可能性があるし……。結局近くで体つきを見るまでは分からなかったというわけよ。皮肉なものよね。」

「姉さんは君に何を伝えたかったのかな？」

「さあ……私にはさっぱり。謝りたかったのかしらね？ 私の中の姉さんならそうすると思うわ。」

悲しげに微笑む美喜の姿が列雄の目に焼きついた。

「それでいいと思うよ。」

列雄も微笑む。それ以上の言葉はいらなかつた。

「あなたと以前にもっと深く知り合っていたら私も……なんでもないわ。忘れて。明日のためにも、もう寝るわ。」

そう言うと美喜は立ち上がった。そのとき列雄は本能的に美喜の手をつかんでいた。そして美喜の顔を自分の前に持つてくると、目の下に優しくキスをした。

「今のは何のキス？」

「おまじないだよ。涙を止めるための。」

烈雄は美喜の目に涙が浮かんでいたのを見逃さなかった。

「君のハンカチにはなれないから、せめて涙の量を減らしてあげる。」

美喜は頷くと、笑顔で部屋から出て行った。あんなおまじないでも効くんだな、と烈雄は妙に納得してしまった。

翌日、烈雄が目を覚ますと、既に九時を回っていた。顔を洗った昨日の出来事を考える。何だか美喜と会うのが恥ずかしい、と烈雄は思った。顔を洗ったりしているうちに、朝のミーティングの時間になった。

リビングには烈雄が一番乗りだった。十分前なのに一人であることに不安を覚えたが、今回は珍しく、十時の段階では全員が揃った。

「ミーティングを始める。ノルマクリアの申告をするものはいるか？」

黒田がそう言ったのにも関わらず、誰も何も言わない。

「それでは終了だ。食事に移ってくれ。」

初のミーティングはあつという間だった。もちろん既にノルマを達成している人はいるだろうが、今日は誰も申告しないだ

ろう、と烈雄は事前に予測していた。リスクが大きすぎるからだ。ミーティングは明日の朝も行なわれる。当然今日よりも明日のほうが、起こる出来事というのはい多い。そのうえ「また人が死ぬかもしれない。『ノルマを誰かに当てられたら死ぬ』というルール上、回答の権利者（要するに生存者）は少なく、起こる出来事は多いほうがいい。そういった条件を考えると、今日よりも明日ノルマ達成を宣言するのが断然有利だと思われる。」

朝食が始まったが、昨日ほどの重苦しさは既になかった。食事が終わると、島崎が美喜に話しかけた。

「昨日は、そのやわなお兄ちゃんのところへ行ったみたいだな。ああいうのが好きなのか？ おれにもいいことしてくれよ。」

島崎の上品な反応を美喜は無視したが、それに反応したのは、意外にも宮下だった。

「全く下品な男だな。少しは黙れないのかい。」

そう言っただけで島崎を睨んだ。小さな声だったが、いつもとは違い、芯のある声だった。宮下がこの発言をしたことが、烈雄には不思議だった。今まで沈黙を保っていたのにどうして「おそろく昨日食事をできなかったのでストレスが溜まったのだろうか、とも思った。考えてみれば、今朝も食卓にいたが、宮下の

口にもものを入れる姿を、烈雄は見えないような気がした。  
 「言ってくれるじゃねえか……。俺はな、お前みたいに偉そうなやつが大嫌いなんだよ！」

そう叫ぶと、島崎はポケットから銃を出した。銃口を宮下へと向ける。

「止めろ！」

引き金を引こうとする島崎を見て、烈雄は咄嗟に飛びついた。しかし、烈雄が島崎の銃をおさえた瞬間、銃弾は飛び出した。

銃弾は宮下の頭を貫通し、宮下は一言も言わず、床に倒れた。

「なんてことを……」

その言葉は意外にも島崎の言葉だった。烈雄はその言葉の意味が全く分からなかったが、それどころではなかった。

間違いない宮下は死んでいる。見ている誰もがそう思った。島崎は死体を見るなり、青ざめた顔をして、自分の部屋へと帰って行った。なんとも奇妙な光景だった。

「大丈夫？」

美喜は烈雄に声をかけた。

「ああ、それよりも島崎を追いかけた方がいい。様子が変だ。」それを聞いた玉木と美喜は、頷いて島崎の部屋へと向かった。

そこで島崎は死んでいた。青酸カリを飲んだのであろう。血

を吐いて、ベッドに倒れていた。突然のことで、部屋に入った美喜は、ますます混乱してしまった。

「とりあえず、恒例の儀式だ。考えるのはそれからしよう。」

玉木は島崎のカードを探した。カードはベッドの袋の中に入っていた。自身は『二日の間、一切、人殺しに加担しない』と書いてある。

美喜と玉木は島崎の自殺について、少し理解できるような気がした。おそらく、島崎は宮下を殺す気は、無かったのであろう。

しかし、烈雄に飛びつかれて、思わず発砲してしまい、気が動転して自殺してしまったのだ。そのとき、部屋に烈雄が入ってきた。烈雄は死んだ島崎の姿を見ても、顔色ひとつ変えなかった。

「島崎のノルマはこれでした。」

玉木はカードを烈雄に見せる。これには烈雄も驚いた。このときにやっと島崎の最後の台詞を理解することができた。

「宮下さんのノルマは『二日の間、一切、食事をしない』でした。」そう烈雄は答えると、似たようなノルマだな、と玉木は思った。

これ以上会話が進展しそうにも無い状況で、初めに口を開いたのは美喜だった。

「少し部屋で休ませて……。頭が痛いのだ。」

そう言って部屋に戻る美喜に続き、烈雄と玉木も自分の部屋へと向かった。

こうして、残る三人は部屋へと戻った。このときに美喜は頭

が痛かったわけではない。烈雄といったん距離を置きたかったのだ。おそらく烈雄は全て、知つて、と美喜は予想していた。

しかし、美喜には烈雄の考えていることが、全く分からなかった。美喜は烈雄に好意を抱かれていると思つていた。そして自分も少なからず、それに答えることができる、感じていた。しかし今は、それすら分からない。自分の気持ちを探つても、出口のない迷路を当てもなく彷徨つているようだった。そして、美喜は明確な答えを出すことができないまま、昼食の時間を迎えた。

十三時になり、三人が昼食を終えるまで、これといった会話は存在しなかった。昼食が終わると、烈雄が美喜に話しかけた。

「なぜ木原さんを殺したの？」

それを聞いて、美喜は不敵に笑った。辺りに玉木の姿がない。トイレか部屋にでもいるのであろう。

「やはり、気付いていたのね。答えは、分かっているでしょうけど、これよ。」

美喜はカードを烈雄に向けて見せた。そこには『姉を殺す』と書いてあった。

「死体を見て気付いたというのは嘘よ。姉の部屋で話をしてる最中に殺したわ。」

「なぜ、そんな…。」

「なぜつて？ そんなの生きたいからに決まってるでしょう！ では逆に質問するけど、なぜあなたは、私が部屋の前を通つたことを隠したの？ そして、なぜ、宮下を殺したの！」

「それは…。」

「姉さんが清水さんを殺したと言わなかったら、私は初めの殺人もあなたを疑つていたと思うわ。でもね、私は見てたの！ 本当はあのときカードを…。」

「全員、死体を見る」と書いてあったのをちゃんと見たのよ！」

そう言うと、美喜は銃を取り出し烈雄の目の前に出した。

「あなたが怖い…。全てがあなたの手のひらで転がされているようだよ…。私がここを出るためにはあなたは邪魔なの！」

美喜が引き金を引こうとした瞬間に、その動きが止まった。そして一瞬のうちに美喜の体は崩れ落ちた。

「あぶないところでしたね。」

そこには銃を持って構える玉木の姿があった。

「美喜！」

美喜が玉木に撃たれたことが分かったと同時に、烈雄は美喜のもとへと近づいた。

「動くな！ 私は決してあなたを助けたわけではないのです。自分を助けたのですよ。」

意味が良く分からなかったが、烈雄はその場から動かないという選択肢しか取ることができなかった。手元には美喜の手があり、銃が握られていた。銃は烈雄の方を向いている。

「そうですね。美喜さんの持っている銃を、そのまま自分に向けてください。私を撃とうとしたら、私はあなたを殺します。抵抗しても無駄です。」

どうやらそのようだった。美喜の手に握られている銃を玉木の方向に向ける余裕は、一切ないようだ。烈雄は諦め美喜の銃に自分の両手を添えた。

「素直ですね。それではいくつか質問に答えてもらいましょう。」

「まず、こちらの質問に答えてほしい。あなたのノルマは『僕を殺すこと』ですか？」

「その通り。全く頭の回転が速い人ですね。質問は以上ですか？」

烈雄は頷いた。

「では私のターンです。私の質問は『なぜ、宮下を殺したか？』です。あの状況では、あなたが引き金を引かなくても、島崎が殺すのは予想できたはず。まあ、結局彼は殺せなかった訳

ですが……。すでに島崎のノルマを知っていたのですか？」

玉木の落ち着いた口調に対し、烈雄も落ち着いた口調で答える。

「いや、知りませんでした。そもそも勘違いしているようですが、私は宮下さんを殺していません。あの時ははずみで銃を撃ってしまったのです。僕と島崎のどっちが引き金を引いたという訳ではありません。僕は宮下さんを助けるために、島崎に飛びつきました。」

「ではなぜそのような行為を？」

「これ以上美喜を傷つけたくなかった。少なくとも、目の前の人死ぬのを、美喜にみてほしくなかったからです。」

烈雄は玉木をまっすぐ見て、そう答えた。

「あなたの言うことは全く理解できない。そうしたら、あなたの行動は、全てが美喜さんのためだったとも言えるのですか？」

「もういい。話が長すぎましたね。結果はあなたの敗北です。それで良いでしょう。」

「いや、それは納得できませんね。僕はこう見えても負けず嫌いなんですよ。」

そう言っただけで、烈雄は両手でかかえている銃の引き金を引いた。

銃声はしなかったが、烈雄の頭が勢いよく後ろへと飛んで

行った。玉木はその光景を見て、何も言えず、呆然と立ち尽くしていた。

「ゲームオーバーだな。」

一部始終を見ていた黒田がそう言うと、玉木に銃を向けた。

「なぜ……。私の計画に問題は……」

ドン！ 会話の途中で黒田は銃を発射した。黒田は銃をしまい、ゆっくりと部屋を出た。長い物語の終わりに待っているのはいつでも静寂だった。

烈雄は夢を見ていた。そこには何も存在しなかった。いや、違う。そこは、全ての存在が認められる空間だった。そこには美喜がいた。正確には、烈雄の定義する美喜がいた。

「カードを交換したのは私のためだったの？」

そう言うと美喜は悲しい顔をした。

「そんな顔をしないでよ。美喜が僕の部屋の前を通ったのを隠したのも、カードを交換したのも、僕の中の君のためだったんだ。」

「あなたの中の私？」

「そう。僕の中の美喜は人を殺さない。だから木原美沙希は自殺したとね。君はずっと部屋にいた。だから彼女を殺せない。」

「では、あなたは、あなたの中の私を崩さないために、あなたと木原美沙希のカードを交換したの？　そして、私が木原美沙希を殺したときに、あなたの部屋の前を通ったことを隠したの？」

「そう。僕の世界は君を中心に動いていたから。」

「いつカードを交換したの？」

「君が木原美沙希を殺したあと、部屋の前を通り過ぎたのを確認して、僕も彼女の部屋に向かったんだ。おそらく、黒田以外は誰も気付かなかっただろうね。」

「ええ、きつとそうね。初めにカードを受け取ったときに、『自殺』と書いてあるのを見て、あなたはどう思った？」

「初めは絶望したよ。でも君が僕を救ってくれた。」

「あなたの中の私が？」

「正確に言うと、そうなるね。」

「めちゃくちゃだわ。」

「それでも構わない。大切な人は自分の心の中にいれば、それでいい。」

「たとえ幻想でも？」

「うん。」

会話が終わると、烈雄は涙を流していた。そして、それは止まることはない。ハンカチはもういらなかった。美喜が側にい

る。

そして烈雄は眠りにつく。この世界に終わりはない。烈雄が望む限り、この空間は永遠に続く。

美喜の横で眠り続ける。

それだけでよかった。

FIN

# 無題

山崎 太陽

僕の名前は雪彦。

十年に一度という大雪の日に生まれ、祖父に命名された。

祖父、忠治は元国鉄職員。父、清二は大学助教授。母、雅子は専業主婦。兄弟姉妹はいなくて、ペットがグッピー数匹と雑種犬のイギー。そんな家族構成だった。過去形。

両親は僕をユキ、ねえユキ、おいユキ、などと呼んだ。そうすると女の子の名前みたいで面白くて、僕は割と気に入っている。たまに父に「雪彦！」と怒鳴られると男に戻る。一応断っておくと女装趣味は無い。

僕が生まれたのは新潟の、とある小さな田舎町。

土地の九割が田んぼや畑で、視界がやたら開けているために、西にそびえる角田山は町のどこからでも確認出来る。父は、角田山に雲がかかっていると「明日は雨か」などと翌日の天気を予言するのだが、これが結構当たる。昔はすごいすごーいって感心したが、偏西風によって西にある雲が明日には真上に来る、というだけの事である。

角田山は方位磁針の代わりにもなる。隣の村や市に自転車で遠出して、角田山との位置関係を意識していればめったに迷子にならない。

近所に菜の花公園という所があり、春には一面黄色の絨毯が現れ、淡い青の透き通った空に鮮やかに映える。夏には水田が

向こうの景色を反射して、逆さ富士ならぬ逆さ角田が見られる。

秋には角田山が紅葉し、台風が重い稲穂をゆさゆさ揺らす。冬にはひたすら、ただひたすら全ての物が白くなる。雪がどっさり積もり、一時間に一本の電車のダイヤは乱れ放題。つまり雪国だ。

雪国。ゆきぐに。なんて素敵な響きなんだ！ 雪は冷たいけど、『雪国』という言葉からは温かみを感じる。

雪国の出身でない人は、『消雪パイプ』という物を知っているだろうか。雪がよく降る地方では、ほぼ全ての道の真ん中に約一メートル間隔に穴が開いていて、雪がある程度積もると、その穴から水を噴き出して雪を融かすのだ。水は、一箇所につき四つある穴から文字通り四方に飛び出す。その四つの穴のうち三つを足でグッと踏んで塞いで、残りの一つの穴から勢い良く水を発射させ友達や見知らぬ行人に浴びせる。そんな遊びを知らない少年は地元にはいない、といえは消雪パイプが雪国の人間にとっていかに馴染み深い物か分かってもらえるだろうか？ 冬以外には一メートル間隔に点在する印にしか見えないそれは、チャリンコで蛇行運転するのに利用される。『利用』と言うと堅苦しいが、その目的は遊びだ。やってみると楽しい。道のど真ん中をうねうね走るわけだが、車なんて滅多に来ないし、来たら音で分かるから大丈夫。

僕は、そんな『ものすごく』といつても過言ではなくほのぼのとした町で、のびのびすくすくすこやかに育ち、やがて小学校に入学した。

角田町立角田小学校。

その名前からも平和な印象を受ける。実際、平和。周囲にはだだっ広く田んぼが続き、日本人はやっぱ米食ってんだなあと思わせ、生徒は冬でも半袖半ズボンで鼻水垂らしてる（父はその異常な耐寒性を日本の小学生の七不思議の一つに数える）。不良もいないし、いじめも無い。

小学校入学ピッカピッカの一年生、といえば友達百人出来るかな、そんな心配をするわけだ。もつとも十歩譲ってそんな事は無いとしても（つまりそれほど固執してはいないが、かと言って如何せん反論された事も無いのでよく分からないが）少なくとも僕はそんな心配をしたのである。ところがそれは杞憂というもので、友達百人出来るわけが無い、全校わずか八十六人の小さな学校。おまけに友達は五人で十分だった。今でもそのメンバーで遊んでる。よしゆき、たけちゃん、しげお、こうじ、そして中でも一番仲が良いのが、カズ——武藤数正。

カズは僕の親友だ。

僕はカズを『親友』と定義した。定義。

明らかに父の影響だが、僕は『定義』という言葉ですこぶる

気に入っている。『定義』は好きな言葉ベスト3にランクインしていて（あとの二つは『雪国』と『希望』かな）、「人間の定義は何だろうか（サルとの違い）」とか「正義の定義とは？（悪との線引き）」とか「おやつの定義は？（バナナは含むか）」とか頭をひねっている。

息子の僕が言うのもなんだが、父はちよつと、いや、なかなか変わつてる。一緒にテレビを見る時にいきなり「ユキ、お前の宇宙観や人生観なんて私の知る所ではない。少なくとも私は定義と存在を同値であると定義しているタイプの人間だがね。さて、お前はこれから一生の内に実に様々な体験をしていくわけだが、まあ楽しめよ。たとえどんなに苦しくても、人の一生なんて宇宙の歴史から見たらほんの一瞬の辛抱だ」などと語る。

そんな父のせいでも、僕も多少変わっているのかもしれない。いくらでも考え事に時間を費やせる。周りの友達はこんなにあれこれ考えているのかな？ 気になるけど聞きにくい。

そうそう、話を戻すと、カズは友達グループの中で一番家が近い。だから自然と一番親密になつて、僕はカズをいつしか『親友』と呼ぶようになった。カズは親友だ。親友はカズなんだ。

ところで『小学生』という奴はとにかく暇な生き物だ。少なくとも田舎の公立小学校に通う僕らは、中学受験なんて全く無

縁。

一年生など、給食を食べたら黄色い帽子を被ってランドセル担いでこのこ下校してしまう。そののろまさといったらどう表現してやろうか……成人男性が三分で歩く道のりを、三十分はかけて咀嚼し嚥下し堪能し、時には反芻する。石ころを家まで蹴ったり、教室のチョークを盗んで地面に丸を描いてケンパで帰ったり、グリコで帰ったり。グリコとは、ジャンケンで勝つ度に何歩か歩いて、先に目的地に着いた方が勝ちという遊びだ。

そんなこんなでやつと家に着くと、すぐに飛び出して空き地や川原や神社に集合して夕飯まで遊んだ。缶蹴り、鬼ごっこ、かくれんぼ、ケイドロ、ひょうたん、サバイバルゲーム、草野球、草サッカー、探検、更にピンポンダッシュにザリガニ釣り、と、枚挙に暇が無い。

カズは背が高くて色黒で、足がムチャクチャ速い。単純に足では誰もカズに勝てないが、僕は頭脳プレーでカズと互角の戦いをしていて、と自負している。例えば鬼ごっこでは、鬼に身体や衣服を触られてはいけない。そこで僕は傘を持って逃げて、カズに追い詰められた時に傘を開いてカズを近づかせなかった。青い大きなビニルシートに芋虫みたいに包まった事もあった。カズは僕の反則スレスレプレーに腹を立てるほど気の短い

奴ではない。「ユキ、お前、鬼ごっこで普通そんな事するかあ？」とむしろ楽しそうに言う。でも僕が何かやらかす度にみんなの多数決でルールが改正されてきた。

町が赤く染まる頃、すっかり遊び疲れてみんな帰路に着く。

家に帰ると父はよくテレビを見ながら晩酌をしている。職場を六時に出て七時にはいつも家にいる。野球観戦、ビール、枝豆といった日本の親父の象徴的な組み合わせ。何も言わなければ、端から見てごく普通の父親である。父は巨人が負けていると、特に阪神に惨敗していると不機嫌だ。そんな僕は台所に行って夕食の手伝いをする。「雪彦！ 暇なら母さんの手伝いでもしたらどうだ」と言われる前に。

母の料理は美味しい。だが、いやもう本当に美味しいのだけれども、それでも僕の好きな食べ物不動の第一位は『炊き立ての白いご飯』だ。白いご飯で白いご飯が食べられるし、デザートは白いご飯で結構です！ 食後は風呂に入ってすぐに寝る。遊び疲れているのでぐっすり眠れる。

日曜には父と角田山に登ったり、母と菜の花公園を散歩したり、祖父と縁側で将棋を指したり、カズ達と遊んだり、夏休みにはカズも連れて父の車で山、海、川に行き、冬休みにはやはり父の車でカズも一緒にスキーに行く。父の暇つぶりはどうでもよい。互いに一人っ子である僕とカズはまるで兄弟みたいに

ずつと一緒。カズは最早うちの家族の一員だ。

あまりに楽し過ぎて、人生は天国かと思った。

だがそんな事は無かった。

思い知らされた、小学三年の初夏。

祖父の危篤。

梅雨の時期だった。新潟の夏は高温多湿で、夜になっても蒸し暑い。水蒸気を限界まで含んだ空気が肌にベタつく。病院の薄暗い一室で、家族と親戚が祖父のベッドを囲んでい

た。祖父、父、母、僕、伯父（父の兄）、その奥さん、いとこ二人。もちろんカズはその場にいなかった。

そこでどんな会話があったかは覚えていない。会話は特に無かったのかもしれない。どちらにせよ、僕はその病室を支配する重い空気に堪えられず、そつと逃げ出した。そして廊下の窓から外を眺めていた。景色は仄暗い灰色に塗つたくらわれて、風に揺れる木々がぼんやり見えるだけだった。枝がザワザワと動いて不安を煽るが、病室には戻りたくなかった。ああ、もうこのザワザワを見るほうがまだマシだ。

すると母が部屋から出てきて、言った。

「ユキ、たった今、おじいちゃんが亡くなったよ」

母の声は小さかったが語調が強く、僕の鼓膜に届き、僕の体

を揺さぶった。

は？

何、死って？

いや、意味なら知ってるよ、そんならい！

ガツンッ！何かスイッチが入った？

いや、壊れた。どば！

涙を流した。

いつか自分も死ぬんだ！

この悲しくてたまらない『死』って奴からは逃げられないん

だ！

そう思うと涙がどくどく溢れ出た。

なんて素直な感情表現なんだろう。心の中で「死にたくない

死にたくない死にたくない」と叫んだ。

涙を流し過ぎて頭が痛くなった。頭がガンガンガン。ゲロ吐

きそう、うろうう。

もう生まれてしまったからにはいつか死ぬんだ！ 手遅れな

んだ！

それなら生まれてこなきゃ良かった！

涙は止まらなかった。どくどくどくどくどくどくどく。

その日のその後の記憶は無い。

いつ、どうやって家に帰ったのか分からない。

ただ、「生まれてこなきゃ良かった」と、繰り返し繰り返し  
唱えていた事だけは覚えていた。

次の日、やたら思い顔を上げて、やたら細い食道に朝ご飯を  
通過させて、やたら長い通学路を歩いて学校に行った。

僕が教室に入ると、それまで和やかだった空気がぎこちなくな  
った。誰かが僕の祖父の死をみんなに教えたのだろうか。そ  
れとも気のせいかな？ いや、やっぱりみんな気まずそう。

僕はその日一日だるくてずって寝てた。いつもなら必ず怒る  
先生も何も言わなかった。ああ、だるい。そういうのがだるい  
んだよ。みんな知ってるんだ。放課後みんなと帰るのが面倒く  
さいな。慰められたくなんかないからなあ。

放課後、カズが僕の席に近づき、あっさりと、普通に言った。  
「ユキ、今日はサッカーしようぜ」

まるで祖父の死を知らないかのように。家が目と鼻の先だし、  
親同士も仲がいいんだから、知らないはずが無いってのに。す  
げー奴だ。

その日の放課後のサッカーは白熱した。腹が立つほど重い体  
をこき使ってやった。黒いドロドロしただるさの元を汗と鼻水  
と一緒に流してやった。最後はカズのアシストに僕が合わせた  
ボレーシュートがたけちゃんの右手の先を通過してゴールネッ

トに突き刺さった。

僕はカズに感謝した。

ただそれだけ。

これは僕、田島雪彦の平々凡々たる小学校時代の日記だ。た  
だの親友自慢だ。意味など無い。これは全て嘘でした、と終わっ  
てもいいし、次の瞬間唐突に僕が何者かに殺されてしまっても  
誰も困らないだろう。そもそもその存在が不要なこの物語に題  
名は無い。

言いたい事の一割も、書きたい事の一分も、伝えたい事の一  
厘も出力出来やしない。

いくら大声で叫んでも無駄。どんなに長く書き連ねても無駄。  
何度繰り返し説明しても無駄。

無駄なんだ。無駄でいいんだ。

意味は無い。存在しない。定義さえ、しなければ。  
それでも僕には定義したいものがある。

おしまい。